岩波講座 日本文學

日本文學研究法

垣内松三

岩波講座　日本文學

日本文學研究法（上）

垣内松三

岩波書店

日本文學研究法（上）

垣内松三

目次

序說　問題設定

體系的理念

學問の研究の方法を構成するためには、一面には對象と認識との考察に依りて、明確にして周到なる探求の方法を規定し、これを研究資料の取扱ひ方に及ぼす方向と、他の一面には研究資料の取扱ひ方の上から、自らに綜合せられる法則を統一して、方法の體系に收約せしむる方向との二つの考へ方がある。この二者の相互的關係は、約三分の一世紀の間に分裂から統一へと接近して來て、今やその相互的制約の相關の上に、更に體系的理念がはたらきかけて居ることを認めて、この立場から方法論的考察が行はれて居ると見ることができる。こゝに研究法の名の下に考察せんとする主題も主としてこの點にあるのである。

研究法の考察に於ける二つの方向は、これを「哲學的」及「文獻學的」といふ語を以つても現はされて居る。「哲學的」といふのは、言語及文學の研究に生理・心理・社會學其他の學科が參與するに從つて、それ等は補助學科として言語及文學の研究の外に立つものでなく、次第にその本質の研究の中に織りこまれて、「哲學的」なる研究の進展は拋物線的に文獻學的研究の方向に接近して來た。又、文獻學的といふのは前代以來我が國の國語・國文學者の執り來つた方向であるが、註釋・考證・編纂等の作業が大成せられるに從つて、クロオチエが「言語の問題を深く研究した哲

學的賦性を有する言語學者たちはトンネルを穿つ勞働者の立場にあることが分るだらう。卽ちある地點に達したら、彼等はその仲間、卽ち別の側で働いて居る哲學者の聲を聞くにちがひない」といつたやうに次第に哲學の方へ近づいて來た。かくして「哲學的」と「文獻學的」なるものは、もう一息で兩方からトンネルを穿ち通すところまでその作業が進んで來たのであるが、現代の狀勢に於ては、その工事は略完成して居ると見ることができる。その研究の資料が言語・文學であるから、その外面は以前の文獻學的研究のやうに見えるが、一音一語の研究にも、新興科學の研究が緻密に織込まれて新しい學問の道が開かれて居る。もしこの兩方の連結を水平線で現はすとしたら、それを底邊とする等邊三角形の頂點より下した垂直線の方向は體系的理念を示すものとなるのである。然るに我が國の言語・文學の研究の狀勢に於ては、この二つの連結が全うせられないために、(どこに連絡線を見出してよいかも分つて居ない)兩者の距離が遠く、(幾重にも紛糾して居て測定が簡單でない)その相互的關係が成立つて居ない。從つて研究法といふのは文獻學的研究法のことと考へられて居るのであるが、クロオチエのいふやうに、いつかは「哲學的」の側からトンネルを穿ち進んで、壁一重のところまで近づくにちがひない。現在に於ては、それが外國文學研究者の立場からのみ聞えるのであるが、少數の尊敬する學者の外には、それを日本文學の研究にまで進めないで、傍觀者の冷やかさを以つて、(幾分の啓蒙的態度を加へて)日本文學の研究を見て居る。日本文學の研究者の側からは、傳統的學風を固執して、(文獻學的の立場から研究の不備を蔑視して)それに對立せんとして居るのであるが、若し兩方から少しも惡びれることなく、その主張を正直に語合ふことができたら、その融合の上に淸新なる研究が現はれて來るにちがひない。こゝに研究法の名に於て考察せんとする問題は、かうした相互的偏向を制約して、體系的理念の華に於て、それ等の

平衡を求めんとすることである。

こゝに更に一歩を進めていへば、體系的理念の要求は、一般的なる方法論の考察を以つて足れりとするものではない。それを研究者各自の意識現象の中に移して、研究の方法と實現との體驗に肉薄し、これを體系的理念の前に据ゑつけて、容赦なくこれを分析することに依つて、その成分を目の前につきつけて見せるのである。こゝには研究の方法と實現とに關して、もはや無用の遁辭と强辯とを許さないのである。この事を分りやすくするために、こゝに最近十年間に殆んど全國的に採集したる約二十萬人（兒童・生徒）の讀方の特性に就いての簡單なる實驗に就いて語りたい。その結果は概ね四の特性に統一することができるのであるが、その中劣等と見るべきものを省いていへば、それは血型學のO・A・B、AO・BO型と同一の結果を示して居る。これに依つて、讀方の特性の眞因は、むしろ讀む作用の深底に在ることを認むることができるのである。この實驗はこれを移して、なるべく多くの註釋書が作られて居る一作品を選んで、それに關する學者たちの業績を透して、その特性を推定し、それに基いて理會の心理學或は理會の社會學等の資料を求むることができる。學理的にいへば現在日本文學の研究に從事せられる多數の學者の業績の分析の上にも、この觀測を及ぼすことが不可能であるとする反證は擧げられてないであらうと思ふ。我々はこゝに古來卓越なる學者が、その一生を通じて、常に研究の精神を精練して止まなかつた心境を會得することができるのである。又更に日本文學の研究者の研究法に關する雜多なる立言に就いて批評を試みる事は全く無用であると考へることもできる。何となれば我々は雜多の中から、最よくわけの分つた人のいふところを擇び出せばよいからである。そして私の信ずるところでは、研究の體驗が深刻であるほど、その立言は最も單純化されたものであつて、ちやうど一コ

ロンブスの卵」のやうなものではあるまいかと思はれる。こゝに研究法の名を假りて考察せんとする課題は、半意識的な探求の精神に光と力とを與へて、無限の研究の道程に上らせる信號として、體系的理念の最も簡明なる表出を求むることである。

研究法の課題を研究者の各自の問題とすることに依つて、こゝに述ぶるところは、研究法に負はされた手引の名に似合はしくないものとなる。案内記にはよくこの窓から向うを覗くと彼處にこれこれのものがある、それについてしかじかのことを見よと記されて居る。旅行者はその通りに見て過ぎ去る。研究法もこれとよく似た仕方によつて、問題と參考書とを擧げて、これを研究者の便に供するものと考へられて居る。それは全く無用のものであるなどとはいふことはできない。しかしこゝには、見られるものよりも、見るものを主題となすべきであるから、「窓」を通り越さないだけのことは念入りに注意しても、その覗き方までには立入らない。研究演習に於て始めに行はれる序説は、「探求」(Forschung, Research) の窓を左右に押開くだけであつて、そこから見ることと考へることの自由を束縛するものでない。卽ち「探求」は各自の全心全力を集注しなければならない作用である。唯、それをして最有效ならしめるために、事の大小輕重を商量して、目のつけ方を定めることに就いての注意を缺くことはできない。その目標となるものは、「形象」と「理會」との二つの問題である。

「形象」の名の下に、言語・文學の問題が考察されるやうになつたのは決して新しいことではないが、

形象の問題　その旨意は明かにされて居るといふことはできない。しかし、こゝにはそれを十分に述べる餘裕がな

いので、研究法に關係のある部分に止め、主として「理會」との關係に言及して見る考である。言語・文學形象の研究に於て、現象學的考察が試みられてから、先づその要素を分析して、「記號」（音・文字・語）と、「相關者」（直ちに題材ではない）とその兩者の「關聯」を加へて三とし、更にこの三者の關係を連結して、（一）**妥當作用**（相關者より意味へ）（二）**如實作用**（意味から記號へ）（三）**中和作用**（相關者と記號との）とを認め、これに加ふるに、（四）**支持作用**、（五）**止揚作用**に深めることに依つて、言語・文學の意識現象を明かにして、言語・文學の本質の考へ方を一層精しくした。（このことは既にいくたびか述べたことであり、その中微妙な點に於て私見の加はつて居るものもあるが、この考へ方は早く本居宣長、富士谷御杖等の素樸的なる考察の上に現はれて居たのであつて、現象學的分析と統一とは、それに多少の附加と充實とを試みたものと見てよいと思ふ。）その結果として、茲に先づ二つの事項が規定せられるのである。その一は所謂内容と形式とを一元的とし、これを全一として見ること。その二は立體的な考へ方に基いて形象構成作用を明かにすることである。前者は既に崩れかかつて居る國語・國文學の傳統的學說を平坦にする役割をうけもつのであるが、その地ならしが十分に行はれて居ない。後者はその用意の下に始めて行はれるのであるが、前者が行きとゞいて居ないために、形象構成作用の考へ方の入口よりは、遙かに手前のところに止まつて居ると見ることができる。これを實例を以つていふべきであるが、（それは省いた方がよいと考へる）概ね以上の略述に基いて、國語・國文學に關する論述の中に用ひられてある學術語、たとへば形式・形態・形象・內容・意味・內實・題材・相關者・內在的印象・精神・表現・言表等の用ひ方を注意して讀んで見ると、國語學國文學の考へ方がいり組んで、はつきりしないのはどの點にあるかを簡單にテストすることができるからそれに讓る。又現在の言語・

文學の考へ方から少しく遠ざかつて居る形象の問題に就いては結語に於て再び考へる機會をつくる。茲には日本文學の研究法を考へるために、古くから少しづゝ考へられて居た形象の問題を一層明白に提出したのである。

形象構成作用の考察と、理會の問題との關係は二つの方向に分けて考へることができる。その一は理會が表現の作用に隨伴する作用であり、その二は表現の作用に逆行する作用である。前者は制作の展開に沿うて表現面に達する過程を明かにすることを目的とするのであるが、こゝに更に「觀念論的なるもの」と「實證論的なるもの」との對立が分派する。又後者は以上の方向とは對蹠的關係に立ち、表現面（音・文字・語等）の註釋から進んで、意味を釋明しようとするのであるが、こゝにも「文獻學的」なるものと、「哲學的」なるものとに分れて居る。この複雜なる交渉に關して日本文學の研究の現狀に於ては、これを整理する意向は僅かに解釋・鑑賞・批評等の術語に就いて、個人的主觀的なる見解が行はれて居るに過ぎないのであるが、素より徹底したものといふことはできない。この錯雜せる關係を整理してそれを統一するためには、「意味」(Sinn) と「意義」(Bedeutung) との差別を明かにするのが早道であるやうに思ふ。

こゝに「意味」といふのは、音・文字・語・句・章等の研究を透して逢着した到達點をいふのであり、「意義」といふのは、作者のいはんと欲することが、音・文字の尖端まで滲み出して居るものをいふのである。一は部分から全體へ、他は全體から部分へ向ふ方向であるから、その二つの方向はすれちがふやうに考へられるのであるが、この兩方に立つて居る二つの「全體」と二つの「部分」との關聯を求むるときに、音・文字・語・句・章に至るまで、「意味」の方からの見方・考へ方と、「意義」の方からの見方・考へ方との間に、三つの連絡點が見出されるのである。これを

（一）言語・（二）事實・（三）精神の三つに分けて考察することができる。これを平易にいつて見ると、「言語」に於ては、語る人と聽く人との間に同じ言語が存在するのであるのに、僅かのアクセントの相違などに依りて、異つた作用として現はれて居ること、「事實」（Sach）に於ては話される唯一の事實の兩面が、一方にはその表だけ認められ、他方にはその裏の方に力點が置かれて居ること、「精神」に於ては、「言語」や「事實」の全體を被ふ話し手の心もちが、聽く方に於ては、その人の心もちでうけとられて居ること、などをいふのであるが、更にこの三者の關係を考へるために、その兩方がその到達した限界に於いてぴたりと足を停め、なほその間に於ける分裂を見つめて、薄明の中に道しるべを見るときのやうに、この分裂示標を求めなければならぬ。この分裂の兩方を明かにするために、一方を表現（Präsenz）といひ他方を再現（Repräsenz）とする。そしてこの二つは同じものであらねばならないのであるが、學問上からは、その限界を明確にして、その二つの限界の間隙を契機（Moment）と名づけて、「意味」と「意義」との關聯の中諦に据ゑつけ、「意味」に於て見出されたものと、「意義」に於て現はれて居るものとの連絡を精しく考へる手がゝりとするのである。こゝに形象の概念は決して固定したものではなく、生々と動いて居る意識現象として、理會の對象として吟味せられ又、理會の問題は嚴密なる解釋學的對象とせられるのである。

理會の問題　言語・文學の研究作用を示す語として一般に、「理解」（廣義に於て）が用ひられるのであるが、それが「意味」にのみ關する時にも、「理解」（狹義に於て）が用ひられる。それは學問上「意義」を求める「說明」に對して、その限界を明かにする必要があるからである。故にもし「理解」と「說明」と

の作用を綜括していふ時には、別に「理會」を以つて示すのである。（以上の區別は解釋學上周く認められて居るところであるが、この術語の設定は私案に過ぎない。）

「契機」に於ける「形象」の「理會」は先づこれを二つに分ち、更に一方には（一）理解（二）誤解（三）無理解と他の一方には（一）評釋（二）鑑賞（三）批評（主觀的）等に細分して、その個々の作用に就いて、生理・心理・社會學的研究を深化し、これに依りて、「理會」を對象とする「解釋學」が再生するに至つた。「解釋學」はこれまで「解釋」と「批評」との二部門に分けて、更にこれを細分して考察する習となつて居たのであるが、「批評」の根柢をなす哲學的考察が進展するにつれて、「註釋」と「批評」との間に介在して居た「本文批評」（これは古典に於ては勿論、近世文學に於ても原稿と刊本との關係を明かにすることであるが、そのためには先づ註釋作用が先立たなければならぬのであるとともに、本文批評が正確でなければ歴史的・美學的批評は始められないと考へた爲めである）の中に、この二部門が合流し、この介在者のために分れて居た研究の作用が近づくとともに、新しい「解釋學」の研究の上に廣々とした流れが勢よく岸を嚙んで走るやうになつた。そして言語を資料とする解釋の研究ではあるが、言語の性質は、人間精神の根源、社會現象の核心に密接な關係を有する作用であるから、「解釋學」の範圍は他の精神科學の方面にも擴げられて、精しく考へられて居る。これを言語・文學の問題に限りていへば、その對象としての「形象」の現象學的考察と伴つて、その認識としての解釋學的研究は、一言一句をも見落すことなく、原稿の上に於ける縱橫補訂の跡をも精しく考へて、言語意識現象の内面に動く精神的意義を明かにすることを目がけて進んで來たのである。ここには「觀念的なるもの」と「實證的なるもの」との對立もなく、「文獻學的」と「哲學的」との背反もない。こゝに

始めて、分裂示標の示す遙かなる一路が目前に見え初めて來た。こゝに達する迄には、少しく險難の途を通らなければならなかつたが、我々はこゝから一歩も逆戻りしてはならぬ。最早少しも躊躇することなく進出しなければならぬ。

研究法系列

研究の進路を明かにするために、更に研究法の系列を考察して、敍述の秩序を求むるとともに、最後の結びの語に導く用意ともしたいと思ふ。

文獻學的研究法に於てはその部門を「歷史的」と「美學的」とに分けて考察する。その一つは文學の生立を、他の一つはその價値を明かにするのであるから、一篇の作品に就いても、文學全體に關しても、この二つの系列を缺くことはできない。前者を「文學史」とし、後者を「文學概論」とし、或は、前者を「縱」の研究とし、後者を「横」の研究として、半意識的にその兩者が方法體系の系列概念であることが認められて居る。（日本文學研究の學科課程に於ても、この組織に基いて二講座が設けられて居る。しかし現在に至るまで「文學史」の方が重くされて、所謂「文學概論」の方は日本文學の研究者の手許に無かつたからでもあるが、幾分輕くされて居るやうに感ずる。この偏向が日本文學の研究の進展の上に影響するところは少くないやうに思ふ。又所謂文學概論は、以前から日本文學の研究者には取扱ひかねるものとする誤解があつて、多くは美學又は外國文學の專攻者に受持たれて居るのであるが、學問研究の目的が貫徹されたらどちらでもよいが、現在の狀勢に於てはこのことも日本文學の研究の立場からいへば考へて見なければならぬことである）しかし在來の事情のためにこの二系列が方法體系の理論的關聯として緊密なる依存の中にあることは、十分に認められて居なかつた。もし又それが縱と横との研究であるといふことが氣づい

て居るとすれば、この二系列の經緯に依つて組織せられる文學研究の基本概念の考察は當然念頭に浮び來らねばならないのである。卽ち二系列概念の根柢に於て、それ等を方法的に體系づけることに依りて、日本文學の研究の上に、學問としての明確なる組織と秩序とを齎らさなければならないのである。たとへば「文學科學の哲學」の研究の如きは、當然の要求に基くものであらねばならぬのである。そして隨筆的ではあるが、我が國に於て既に、その直觀の鋭さと深さとに於て、それに讓らない先人の考察があつたのである。それは現代の文學研究によつて學的基礎を與へられねばならぬのである。故にもしこれを理論的關聯の考察に於ける必然的要求と見るならば、こゝに第三系列として「文學理論」が現はれて來る。學問上の一般用語例からいへば、こゝにいふ「文學理論」の性質は「文學概論」といふべきものであつて、所謂「文學概論」は、各文學作品群の研究を事とするのであるから、むしろこれを「文學系統論」とでもいふ方が、却つてその實際に近いのである。故に方法體系の理論的關聯の裡に在りて、研究法の方向は三つの方法系列に分けて考へることができるのである。この各系列に沿うて、既に幾多の研究が集積されて居る。その研究史的考察は、この課題の範圍の外にある。しかしもしなしうる限り、この各系列の下に研究業績を類從して、學理的批判を加へることができたら日本文學の研究の方法は、この方面からも自ら會得せられ、それがいかなる方向に向ふべきであるかといふことも明瞭になるのである。しかしこゝにはその方法を探ることはできない。專ら解釋學的見地に立ちてこれを考察しなければならぬ。然るにその方法に依つて分り易くするには、種々の心づかひが必要である。故に思ひきつて、手とり早く玆に唯一つの最も簡單な、又最も肝要な焦點にまとめて、先づそれを指すこととする。それは「手」を以つて研究するといふことである。「日本文學研究法」の解說としてこの奇異な助言が、何を含

むのであるか、これを研究の三系列について分敍する。

第一章　文學史研究法

文學史研究法を說くに當りこゝに一般に行はれるやうに、文學史の定義（模型說）からは出立しない。

全一として 何となれば、今まで現はれて居る「日本文學史」を讀んで研究者のいだく文學史研究に關する最初の疑問は、その定義にあるのではなくして、多くの文學史書に於て、初めの方に宣言される定義の約束が果されて居ないこと及び方法論として揭げられる事項が申合せたやうに、「便宜的なるもの」に置換へられること等に關するものである。それは日本文學史の研究に於て、正當にして自然な疑問であると思ふ。又もし文學史觀が各々その旗印を明かにして、種族史的・社會史的・新列傳史的・新作品史的・樣式史的等の主張を徹底せしむるために討議が行はれて居るとしたら、その批判から出立するのが當然である。また、文學史方法論が、政治史的・地理的・列傳的・流派的・典型的、及び動機等を後にして、社會學的・血液分析學的・精神分析學・深部心理學的の方面にまで進展した學說と方法とをとり入れて、それを實現するために議論が行はれて居るとしたら、これ等の方法論をも論評しなければならぬ。しかしこゝにはさうした手續に依りて問題設定を行ふ必要を感じないのである。一言にしていへばその定義と方法論とはいかやうであらうとも、その定義は今日より半世紀も後の方にある文學史觀であり、方法論は諸方法論の錯雜又は感想である。故にその實際に於ては文學史の定義と方法論とを外にして、常に基礎的研究の名

の下に避難して、書史的敍述を以て、「文學史」の代用とするのが習慣のやうになつて居る。（稀にこの外に出づるものもある。その術語のみを見ると仔細があるやうであるが、その考へ方とその實現とに於ては考察が行きとゞいて居るとも思はれない。）こゝに文學史に就いての疑惑があるのである。故に文學史の定義と方法論との考察が必要でないといふのではない。しかしそれ等の議論から出發するよりも、むしろその手もとにある「日本文學史」に就いて、「文學史といふものはこれでよいのか」といふ疑惑に出發點を置き、又それを尊重し、そこに探求の精神の動力を認め、この疑惑を解明する方向を擇むのである。學問の出發點は常にさうした疑惑の上に置かれるからである。

勿論、文學史の研究に於て、書史的及び傳記的研究が重要であることは素よりいふまでもない。それは文學史の研究に於ては始であり、終であり、一切である、故に最も堅實に行はれなければならないのである。しかしその重要性の見解に就いては相當に差異があるのである。一般に文學史の基礎的研究としての書史的敍述に就いて疑惑を感ずるのは、既に見解の差異が一分づゝ離れかかつて居ることを示すものである。それが更に遙かに離れて極限に達したとしたら、そこに於ける見解の差異はいかなるものであらうか。それはその外觀に於ては、同じく作品と作家との研究に精進するものであるから何等の差がないやうに見えるが、研究史に徴すれば、この推移の間には相當の過程が在る。即ちこれを書籍と履歴として取扱ふのではなく、作品を透して作家の肖像を見、作家の精神的意義を作品の上に求めんとするのである。この兩極端の間を維ぐ一線の上にあらゆる文學史の研究法に關する意見と、それに基く「文學史」とが見出されるのである。しかしそれは文學史の上に於て重要な地位を占むる作品と作家との理解と說明を目的とするものであるから、一つの極端から他の極端へ導く橋かけとなるものと見ることができる。これを日本文學史の研究

に就いていへば「歴史」として作品と作家とを結合する方法から、「展開」の上に於て、作品と作家とを統一する方法へ移すものといふことができる。日本文學史を、モザイクの工人の作業のやうな方法を以つて綴ることから、一塊の大理石から神々しい姿を刻み出す彫刻家のごとき手法を以つて日本文學の展開を躍出せしむる方へ轉ぜしめるものと考へることができる。然らば現時に於ける文學史に於て要求せられる基礎的研究は、「日本文學史」を結合體として見ることではなく、先づ「日本文學史」を全一として見ることであると信ずるのである。

この立場に於て、書史的・傳記的研究は、文學史的敍述の脚註或は附註として置換へられて、作品及作家の文學史的理解としての部分を分擔し、別に作品及作家の文學史的說明としての文學史的考察はこれに代りてその要部を占めなければならぬ。それが文學史研究の異說の生ずるところであるから、理論としても、研究の業績についても精しく檢討しなければならぬ。そして、作品及作家の文學史上に於ける位置・關係・價値の說明が滿足し得られるまでは、常に疑問符を附してその檢討を續けなければならぬ。故に日本文學史の研究に於ては、先づ全一體としての「日本文學史」の展開狀勢を明かにするために作品と作家との歷史的順序を認定して、その輪廓を書かねばならぬ。こゝに歷史的說明の要求は自ら生じて來る。文學史觀としての議論はこの必然的なる要求に出づるものである。故に文學史觀の演繹に依るよりもこの自然の順序に從つて、先づ「日本文學史」の輪廓を書き、その歷史的說明の方法を思索することに依りて文學史觀の當否を批判し、建設するとともに、日本文學研究の全體系との關係に於て、文學史研究の方法を明かにしなければならぬ。

文學史の研究に於て、作品と作家とが新しく見直されるまでには、長い文獻學的研究とそれを崩壞せしめた哲學的考察との軋合が約三分一世紀も續いたのである。然るに最近に於てこの兩方が接近して

生年序列

新しい文學史論が起りかかつて居るのであるが、その先頭に立つものは時代概念の問題である。そしてその問題を解くに當つて、最初に來るものは作品と作家との時代的次序を明かにすることであつた。日本文學史の研究に於ける新興の氣運もこの方向に動いて居ると見ることができる。

文學史の研究法として探求の精神をどこ迄もこだはりなく進展せしめうるやうな出發點は極めて手近なところにある。それは作家の生年序列の調査である。日本文學者年表・續日本文學者年表等に依つて、作家の生歿年を調査して、これを時代的次序に統一することである。この際特に注意を要するのは、生年を基準とすることと、（歿年に依つて作家の年代を考ふる習慣があるから、ある作家の精神生活は前代に屬するものであつて、歿年に依つて次の時代に押込めて居る。いかに長命であつても制作生涯の絶えた餘生は作家の年代を定める根據とはならぬ）又歿年のみしか記載されて居ない作家の生年を確かめるには精密なる調査を要することである。次にこの「生歿年數」を記載するために、方眼紙の一方形を一個年として（一方形を五年或は十年としてもよいが、なるべく一個年とする方が確實である）その生歿年數を一直線として紙面に現はすやうにするとせば、それは文學史の「展開」を客觀化する基礎となるのである。この方法に依りて、多くの作家の生歿年數の記載を行ひ、次々に生年順序に依りて生年序列をつくる。かくして日本文學史の全體の輪廓を畫き出すのである。この輪廓の上に現はれる線條の讀方は概ね次の三つである。

その一は一般文學史の敍述に於ては、それが作品群に分たれ或は作家の出現順に依つて前後するために、文學史と

しての把捉が明瞭に示されないのであるが、もし諸作家の共時的關係が面前に置かれたら、時代的關係が明白に浮び出して來るのである。たとへば近世文學に於て井原西鶴から平泉鬼貫まで、假りに十五人の作家に就いてその生年序列に依つて秩序だてて見ると、その差が極めて少なく、この短い年數の間に多數の作家が現はれて居ることが分る。これは他の時代に於ても同樣であるが、これを概括すれば、一般に文學の盛んな時代として知られて居る期間は、生年序列の稠密な線條に依つて示されるのである。その反對はその疎らな形に於て示されるのである。又この二つの關係は、恰も山と山との間の谷のやうな形を示して居る。こゝに作家群の統一は、文學史に於ける或る時代を示すものであり、この手續に依りて「時代」が客觀的に認められるのである。

その二はある期間に於ける作家群は、同一時代の共通の環境の裡に生きて居るのであるから、創作の根柢にも共通の動力があつて、ある時期を成すと考へられるのであるが、それが政治史的もしくは地理的區分の如き次元を異にする立場からは、これを便宜的に統一することも可能であるが、文學現象の狀勢は複雜な因子の聯絡に依つて織られて居るのであるから、ある期間の統一としての文學史に於ける時代精神を設定することは容易でない。しかしこれを時代樣相（廣義に於ける）として、その統一を認むることは不可能ではない。作家は多數であり制作の方面は多樣であつても、その根柢に鼓動する共通の時代の響を聞く心構を以つて作家群が文學史上に於ける詩人群像として、作品の深奥から話しかける交響の中に共通の時代律動を感ずることができる。

その三は一般文學史に於て、主として政治史的現象から類推して、一時代の特性をそれと同一であるごとくに說明されて居る時代樣相の說明の上に一層確實なる根據を與へることである。たとへば中世文學を暗黑時代であるとし、

或は亂離の時代であるために文學が衰へて居ると說明されて居るが、もしその時代の作家の生年序列をこゝにも假りに十五人の作家に就いて調べて見ると、いづれも高齡に至るまで制作の生活をつづけ、しかもそれが擊實なる精進の生涯であることを見ることができる。その作品にも現はれて居るやうに、かゝる制作の心境には、世上の現象とは異なつた安住の境涯と、時代の苦惱を超越して、しかも時代と共存する志向とが明瞭に觀取されるのである。蒼い光であるかも知れぬが暗黑ではない、靜寂であつても亂離ではない。これと現代文學の現象とを對照すれば、明治文學の作家が短命な事に今更ながら駭かされるのである。これには思ひつきの說明は試みられて居るが、帶つて島崎藤村氏が、その說明に就いて溫やかではあるが、嚴肅な反感を示されたやうに、同時代の空氣の中にあつて、時代の脈搏を感じた我々も亦、その原因とも考へられるものは、身體とか生活とかの是非よりも一層深刻なものであつたことを考へないで居られない。純情なる青年の目に映じた新しい「時代」は、極度の興奮と緊張と同時にそれに相應するだけの沈靜と弛緩とを感ぜしむるものであつた。その實例は一二の薄倖の詩人思想家の沈痛なる生涯に就いて見ても、時代との關係を窺ふことができると思ふ。

以上は僅かに二三の問題を提起したに過ぎないのであるが、時代の姿を浮彫にする心持を以て、自分の手を動かして、次第に「日本文學史」を面前に持來たすにつれて、この作業の中から新しい探求の方向が現はれて來るのである。それは研究者の天賦の能力に依るものであつて、他人から教へられて、それに追隨するやうな無性無力なことがらではない。故に研究演習に於ても常にさうであるやうに、その指示の方向は十分なる用意と信念の下に一定して動かすべからざる指導案又は研究案として提示せられるのであるが、その研究の進行は、各自の自由討究に一任すべきもの

であつて、その自由さの中に鍛錬と內省の方向を見出すものこそ、眞に學を知り、學を好み、學に忠なるものといふことができるのであらう。さうしてその探求の方向に當つて次に逢着するのは、文學史研究法に於て最も紛糾せる文學現象に關する問題である。

文學現象

文學史の研究に際して、既に論述せられたる學說を學說として採定して、そのいづれかの學說を基準として、文學現象を說明しようとするものは既に研究の方向を過つて居るものである。文學現象に關係のある學科の學說を應用して文學現象を說明せんとするものも亦、研究の方向を見失つたものである。文學現象の研究は、自ら文學現象の觀察と思考の澄明なる方法に依つて、研究の大道を進むのでなかつたら、その課題を解釋することはできない。

文學現象の觀察に於て、直ちに想到するのはそれと社會現象との關係である。社會現象の諸相は複雜であるが、それを文學現象との關係に於て考へる時に、社會現象は先づ相關者として作家の制作の關心に連なり、更に作家の內在的印象として心の底にその影が沈む。文學の制作に於ては作家の個性の內面に於て支持せられ止揚せられ、その光源の返照が作品の上に表現せられる。一般的にはそれは現實と理想との關係に於て觀察されるのが常である。假りに社會層の特性を、「保守的」・「自由的」・「宗敎的」・「經濟的」との四型態に分けて考へるとすれば、ある時代に於ては、その偏向の現象があり、或時代には僅かにその調和を示す時代があるとしても、概ねそれ等の諸型態が反動的に進展する。その社會層に生きる作家の個性は自らその風貌を帶びて、その現實に安んずることを得ない理想の姿が、夢の如

く、幻のやうに、文字の上に現はれて來る。更にその表現は進展して、繪の如く、彫刻のやうに、自然や人生の姿として鮮やかに現はれて來る。こゝに社會現象と文學現象との關係は創造的個性の問題として、社會的・生理心理的・精神物理的に考察せられるのであるが、それは作家の履歴ではなくして、その精神的意義を求めるのであるから、自らその作品の研究に據らなければならぬ。又作品の研究は註釋ではなくして、その實在性を明かにすることを目的とするのであるから、作品の本質の解釋を求めねばならぬ。故にそれを明瞭にするために生年序列の線條の上に、更に各作家の各作品の現はれた年代を適宜の符號を用ひて簡單に記載する時に、文學史を飾る作家と作品との存在が確保され、文學現象を面前に齎らすことができるのである。この手續の下に文學現象の說明の方法が要求せられ、そこに二つの對立概念が現はれる。その一は「實證主義的なるもの」(發生論的)であり、その二は「觀念論的なるもの」である。前者はフランス、イギリスにその故鄉があり、後者はドイツに生立つたものといはれるのであるがいづれも一世紀以上に遡る哲學的源泉から流れ出づるものであつて、今や自然科學的法則と觀念論的法則との交渉は次第に究明されて居るのであるが、いかなる理由に於ても作品と作家との研究はその根柢となるものであつて、少しでも手を絞めることはできない。從つて作品と作家の研究に於ては、「實證論的」であつても「觀念論的」であつても、その「表現」の考察に重きを置くのであるが、この對立概念の融合を求むる立場に於ては、それよりも先づ「再現」を精しく分析して、實在性を求むることに依つて、「表現」の考察にも及ぼさうとするのである。何となれば、前者に依ればその結論は推測の外に出づることはできないのであるが、後者に於ては確實なる存在の分析に依るものであるから、その手續に遺漏がないとしたら、その限に於て特に再現の研究に於て、表現の究竟の目的である實在性が洞見せられね

ばならないからである。こゝに「表現」と「再現」との中諦に於ける「契機」を辿りて文學史を貫く主流を求めんとするのである。故に「實證主義的なるもの」と「觀念論的なるもの」に對して、別に確實なる存在としての作品の分析に依つて、その內面を流れる文學の本質の展開を明かにせんとする方向が現はれるのである。

文學思潮　文獻學的文學史を微塵に粉碎して新たに進出した哲學的文學史は、「實證主義的」（レアリスチック）及び「觀念論的」（ロマンチック）に分裂し、一方には生理心理社會學的研究に依り、一方には精神史的認識論的研究に向つて展開した狀勢に關しては、我が「日本文學史」の研究の立場に於ては直接に比照して考察する必要はないと考へる。何となればそれは約三分の一世紀の展開に依るのであるが、我が日本文學史の研究に於ては、その跡を追ふことなくむしろその期間を飛越して、「實證主義的」と「觀念論的」との融合面としての「時代概念論」から出發したいと思ふからである。しかしそれに先だちて、文獻學的文學史研究の基礎であつた「波狀說」と、精神史的なる「深層說」又は「再生說」とに就いては簡單に述べて置きたいと思ふ。

「波狀說」は一代の文學現象は、隆興期と高潮期と衰頹期との波狀をなし、文學史の全面に亙りて、さうした波狀の連續狀をなすと見るものである。卽ち三百年の隆興期と、その到達點としての高潮期と、更にそれから衰頹期に向ふ三百年とから成る、約六百年の波狀を認め、又その高潮期に就いていへば、六百年、一千二百年、一千八百年の隔期的現象を見るのである。次に「深層說」は、「波狀說」と着眼點を異にするものであつて、それが文學現象の表面層にのみ着眼して立てられたる學說であるに對して、別に文學現象の深底にあつて、文學現象を統率する動力があるこ

とを認め、同時にそれは又、時を隔てて轉生し再生する現象に於ても認められるとして、九百年、一千五百年説が成立つのである。

日本文學史の研究に於て、この學説を批判するに當りて、こゝにも亦作業の精神を主として、研究者自ら三千年に亙る日本文學史の全面の上に、これの學説に依る實習を（學説として取扱ふことよりも、）試みることをすゝめたい。卽ち「波狀説」に於ては、昭和六年を起點として、三百年づゝ遡りて、その兩端から隆まる波狀を描いて見ると、概ね在來の文學史上に於て著明なる一時期とせられた時期が現はれて來るのである。たとへば元祿、建武、延喜、和銅年間の如き時期がそれである。又、六百年づゝ遡れば、建武、大化、景行朝等が見出されるのである。又「深層説」或は「再生説」に就いていへば、最も著明なるものとして、神國觀の再生する時期を求めると、略九百年又は一千五百年を圖表の上に記ることができる。この作業は、「全一としての日本文學史」を見る豫備的實習に過ぎないのであるが、もし研究者の手許に在るいかなる「日本文學史」のテキストであつても、これを右の圖式に現はして見ると、その結果は年表や文字に記されて居る説明よりも、もつと懇切にいろいろの問題を示現することと信ずる。

先づ波狀説は在來の「日本文學史」の時期區分法に近い結果となつて現はれるが、深層説は、二三の試論に見る時期區分法と似て居ることがわかる。然るに更に以上の二つの線卽ち一は水平線上の波狀的連續線と、一は水平線下の間歇的連續線とを比照すると、それがある點に於て次第に接近し遭遇し又隔離することが見出されるであらう。しかも兩者の遭遇する時期は、何時でも內は人心が離れて、放恣、利己、反目、諍心が漲り、外は國際的に國家の危機を感ずる憂慮が生じ、一切の革新が要望せられる狀勢を示す時である。その實現に至るまでの緊張の過程と、その除去

された後の弛緩の經過とは、ともに略同一の因子に依るものである。唯その過程は虹の七色の境や海と陸との界が定めかねるやうに、そこゝに一線を劃することは機械的に陥るおそれはあるが、これを全體から見る時に概ねその境界を見ることができるのである。既に先人に依つて注意せられ研究せられた、「文藝復興」（ペーターの意味に於て）の現象のごときは、その著明なる基準となるものである。かうした作業に依つて示現せられる文學現象の記載の上に「波狀說」又は「深層說」に於て少しづゝくひちがひのあるところ（時としては約一世紀に亙る「文學史的空白」がある）にも、文學史の研究に於ては、重要なる連續性のあることが分る。故にそれを連ねて、しかもその兩者の間隙の意義を求むる時に「思潮說」（以上の理由に依る私案である）といふ名に於て區別して考へられる文學史の考へ方を設けてもよいのではないかと思ふのである。

以上は主として文學史研究法の基礎概念としての時代概念論に屬するものであるが、更にこれを文學史の研究の上に實現するに際して、波狀說は實證主義的學說に近づきやすく、深層說は觀念論的學說に走る傾のあるのは當然であつて、その極端に於ては、說明の方法としての試論が、文學史研究の本體と置換へられ、イデオロギーとして對立するものの如く見られるのであるが、文學史の研究には獨自の境地があつて、いかに近接せる理論的關聯であつても、その演繹や混合を許されないで、本來の着眼點を守らなければならぬ。思潮說に於てはその二つの學說の孰れにも偏向しない、と同時にその孰れもの態度に從ふものでもない。（折衷主義ではない。）何となれば文學思潮說は研究の着眼點を常に文學形象に置くのであるから、內容と形式との融合としての創造的意識現象の展開を對象とし、その說明のためには、以上の二つの學說は孰れもその適當の部分を分擔するものと考へるからである。たとへば歐洲藝術史に

於て、ゴチック式、ルネツサンス式、バロック式といふごとき時代樣相に相似た現象は、我が國に於ては（外來の影響も加はりて）單に藝術のみならず一般文化現象（在來有職故實學の對象とせる制度・儀禮その他）及び生活樣相の上にも現はれて居るのであつて、文學形象の時代樣相は、文化全體の機構と共通なものがある。從つてその說明に當りても、一文學時代層の因子とその構成作用は、或は實證主義的に或は觀念論的に考察しなければならない理由があるのであるが、一層基本的なるものは、ペターゼンが分析したやうに、（一）遺傳（二）生誕（三）敎養要素（四）交友（五）時代體驗（六）先蹤（七）時代言語（八）前代固定等の諸因子が創造的個性の深奥に於て構成せられる「形象作用」に在るといはなければならぬ。文學思潮の研究といふのは、「形象作用」を凝視することによりて創造的個性の內面に連なる歷史的展開を明かにすることを意味するのである。この點に於ても同じく作業的精神に依つて、作家及び作品の序列を明かに記載したやうに、更に深く作品の研究に依つて文學史上に立つ主要なる作品の研究に關する覺書を書き集めて、作家の創造的意識現象を認めなければならぬ。既に萬葉集の研究に於ては、この要求に近づきつつあるのであるが、單に抒情詩系列の外に他の文學系列に於ても、この研究の方向が進められ、その序列を逐次に明瞭に記載する作業を進められることを奬めたいのである。

形象作用

こゝに形象作用といふのは、形式又は形態をいふのでなく、恰も水蒸氣が大氣の寒冷のために凝結して、雪片の微妙なる形象に結晶するやうに、社會層又は時代層の雰圍氣に依つて、作家の精神の內面に於て、文學形象が結晶せられる作用をいふのである。社會層の諸型態卽ち保守的・自由的・宗教的・

經濟的諸要素が形象作用に密接なる關係のあることはいふまでもない。また文學時代層の諸因子が一層形象作用の直接の動力であることも當然である。しかしそれ等が如何にして作家の創造的個性の裡に於て、文學形象として結晶するかといふことは文學史の研究に於て更に重要なる課題であらねばならない。在來文學史の研究に於て、作品と作家との研究が基礎的研究とせられたのは素より理由のあることであるが、その書誌的記載は直ちにこれを文學史といふことはできない。こゝに文學形象作用といふのは同じく作品と作家の研究を目的とするものであるが、この課題は既に社會層・時代層が層々密集して重積せる全一體として日本文學史の豫備的觀察の上に立ちて文學思潮の不可視的なる實體を客觀化し、研究の對象を明白にし、進んで文學史研究の目的を遂行せんとするものであるから、自ら書誌的又は文獻學的なるとその性質を異にするのである。然るにこゝに陷りやすい弊は、既にその豫備的考察に於て直觀せる文學展開の理法に基いて性急に作品及び作家を說明せんとすることである。それは明かに實證的又は觀念論的となるのであるが、豫備的考察を終つてからの研究段階に於ける探求の方向は研究者の個性に基くことが多い（學說から學說に漂泊するものはこゝに考へるまでもない）のであるから、從つてその探求の方向にも無意識的に反省せられざる個性がはたらきかける。又それが日本文學史の研究に於て疑惑の生ずる原因となつて居ることを見うけるのであるが、それを純粹なる學問上の問題として方法論的にこの疑惑を明かにするためには、こゝに再び形象作用の問題を考察しなければならぬ。形象作用はこれを「表現」として考へる時には、最早在來の制作心理的研究ではなく精神分析學・血型學・社會學・美學等の立場から研究を進めなければならないのであるが、これ等の學說は今日に於てはなほ未了の問題を殘して居る。故に方法論的にはこれを「意義の精神的契機」として限界を定める。又形象作用は更にこ

れを「再現」として考へる時には音聲・文字・言語・語法等の言語學的立場から考察しなければならないのであるが、この到達點を「意味的言表契機」としてこゝに足を停める。こゝに前者を説明とし後者を理解とし、更に素樸的に説明を主觀的とし、理解を客觀的と考へるのであるが、研究者の立場からいへば、前者は透視的で後者は關聯的であつて、兩者共に形象作用の内面に於ける實在性の直觀的世界を目標とするのであるから、作品及作家の客觀的理念であるが、それを方法論的に確實にするためには、先づ兩者の契機の中、確實なる研究資料としての言表に據ることを必要とし、「意味的言表契機」に立ちてこれを探求しなければならない。

「意味的言表契機」に於て、第一に把捉し得られるのは、作品の空間性である。それを確保すると共に更に「時間性」を含む「空時性」として研究の方向が深化せられる。なほ一歩を進めて「空時性」を規定する作用として「數概念」に到達することができる。この形象作用の分析の結果として、實在性（眞事・眞言・誠）の構成作用に參入し、更に「意義の精神的契機」に囘向することができる（第三章文學理論參照）。たとへば既に萬葉集中の作品に關して先人の認めたやうに「純ぶな心」と素樸な言表とを、平安朝時代文學に就いては、「たゆたふ心」と優雅な言表とを、鎌倉室町時代文學に於て、「道を求むる心」と幽玄な言表とを見るとする。これ等は「表現」と「再現」との兩面であるが、この「契機」に於てこれを更に深究するために、「再現」の立場に限界を置いて、「空間性」と「時間性」と「數概念」とに分析することができる。「空間性」はその表現面を、「時間性」はその表現層を、「數概念」は、空時性を統率する構成作用を示すとすれば、こゝに形象作用として直線的・相對的・函數的等の作用を見るのである。そしてその考察を確實にするものは、全篇の構成はいふまでもなくジェームスが鳥の飛翔とその枝頭にとまつてあたりを見囘す

姿にたとへたやうに、語の線を連ねる點に、語の並行する間を維ぐ網に、語の中から周に及ぼす渦に於て、助詞と助動詞との微妙なる骨法の展開を見ることができる。以上は主として古代文學に就いて謂つたのであるが、この現象は、中世文學以後近世文學に至るまでの展開に就いてもいふことができる。特に古代文學と近世文學との中間に立つ中世文學及びそれから近世文學に流れ下るものは、「ことば」の最も精練せられたものであつて、多方面の方向を有する點と點との連なりの上に水晶のやうな結晶の形象を見ることができる。

かくの如き形象作用は、實在性の構成作用として內外融合の極致として象徵形式として、哲學的研究の對象となるものである。これを文學現象の立場からいへば、或る時代層及び社會層の結晶であり、又これを文學思潮の裡に於ていへば、「波狀說」と「深層說」とを包括するものである。故にこれを實證的にも觀念論的にも說明することができるのであるが、文學作品の研究に依つて、その「再現」の分析と統一とを試み、作家の精神的意義を探求して「表現」を認識する手續を盡くしたいと思ふ。卽ち大自然そのものから浮き出したやうな日本文學の展開は、これを創造的個性の內面を貫く統一と分裂と純一（更に統一へ）との形象作用の展開に於て探求の方向を進める時に、在來文學史研究法として主張せられたる社會學的・種族史的・精神史的・新列傳的・作品史・樣式史を包含することができる。

こゝまで文學史の研究法を考察するために、常に經驗する文學史研究者の疑惑を分析して、間近く現はれて居る研究方法論を顧みつつ、こゝに達した。その一は作業として正直にまめまめしく、手を以て全一體としての日本文學史の輪廓を明かにすることをすゝめた。日本文學史の基礎的研究（個々の書誌や傳記でなく）はこゝに在ると信ずるか

らである。その二はその基礎に立ちて自ら生ずる文學史の研究の原理としての「時代概念論」を略述したのであるが、これは約三分一世紀に於ける文學史研究法に於ける、文獻學的方法と哲學的方法との統一點であると考へ、又我が日本文學史の研究に於ては、前者が崩れかかつて居るのに、後者が興らないために、研究法の上に疑惑があることを常に感ずるのであるから、この統一點に新しい研究の出發點を置きたいと思つたからである。主としてペターゼンの理論（Literatur generation 1930）に依つて述べて見たが、本意はそれを理論として見る事ではなく、文學史研究法の豫行として又は單に出發點として實際に日本文學史の研究に於てその方法を検討してこの方法の上に改むべきものがあるかどうかを見出すことに力點を置き、且つその方法が機械的に陷ることを避けるやうに注意して專ら研究演習の實習の心持を加へて見た。もしこれを實習するとしたら、その結果として日本文學史の時代をいかに區分するがよいかといふいろいろの假設（研究報告）が出ることと考へるから、研究法の範圍を越えて私案を加へることをしなかつたがなほ將來の研究に於ては、各人相競つて研究した探求の結果として見出された學說に發見の文字を用ひるやうでありたい。その三は、日本文學史の實際の研究に於ては、その全體の展開層の上から一時代層を擇びて、單に作品・作家のみならず、これを日記・記錄・刊行物等に於ける評判・批評・刊行狀態及び改版等の事實に照らして、その生生した作用を把捉して精しく研究することが、研究の方法を知り、且つ研究の實力を鍛へるのに適當の方法であるが、ドイツ文學史に於ける$29—35\frac{1}{2}$平均年數に基く三世代を時代單位としてその前後に亙りて一時代層を假設する方法は、大體にこれを承認する事ができるけれども、唯それだけである。我が日本文學史に於てはその概數約四十年はなほ精しく研究しなければならないものがあり、その實驗はまだ各時代層に亙りて十分に試みて居ないので、研究法と

して統一したる諸問題は文學系統の考察に讓りて、茲には一時代層に於ける研究の着眼點を作品の研究に置くこと、作品の研究に於ては、それが研究者の再構成としての「再現」であることを確保すること、「再現」の研究に於て採る分析の仕方に依つて、これを回轉して「表現」の研究に及ぼすこと等を述べた。これを纏めていへば、全體から部分に入つたのでなく、常に全一體としての日本文學史を見失ふことなく、先づ輪廓を畫いてそれを次第に充實する研究法的順序に從つて敍述を進めたのである。その最後の部分は未完成の形に於て他の各章と理論的關聯を保つものである。

第二章　文學系統研究法

共時的截斷

文學の歴史的研究（文學史）を縱の研究とする時に、文學の理論的研究（文學概論）は横の研究とせられて居るが、しかし文學史を時代層の集積せる全一體として見るとすれば、各時代層は空間的に、單に國民文學のみならず外國文學にも延長せられる。たとへば原始文學に於ては諸民族文學に、古代文學に於ては支那隋唐時代文學に、中世文學に於ては支那宋元明時代文學に、近世文學に於ては歐米文學との共時的關係を保有するのである。唯その研究の態度が、一時代層を纖起關係に於て考察するのであるから、これをソースュールの所謂「時態」として研究し、更に進んで「文學史學」に高まる理論的研究が成立するのである。これに對して一時代層の文學現象には、その時代の社會的・時代的因子に依りて、文學の系列の諸相の著明なる顯現がある。故に一時代層の共時的截斷を行ふ時に、各文學作品群の諸相を一層明確にすることができる。更にもし一作品典型を基點

としてこれを前後に延長すれば、これを各時代層に亙りて文學系列に統一することができる。これは見方に依りては、文學史の各部門とすることができるのであつて、既に我が國に於ても、詩歌・歌謠・小說等の各系統に於てその歷史的考察が發表せられて居るのであるが、その研究の態度は、文學作品の外的交渉よりはその內的事實を考察することであるから、これを「時態」に對して「靜態」としての「文學系統學」とでもいふべき理論的研究が成立するのである。日本文學の研究に於ては、文學史に於ては文學史學が無く、文學概論に於ては系統史的研究の無いところへ、所謂「文學概論」が輸入せられたために、文學研究の全體系が歪んで居るのであるが、文學史と理論的關聯の裡に於てその研究を科學的に統一するためには、これを文學系統の歷史的及び理論的研究の兩方面を共備する一部門となすことができる。その研究を明かにする手續として、先づ共時的截斷に依りて一時代層の文學作品群を秩序して各系列に組織しその各系列が文學全體系に於ける關係を研究の對象とする順序を定めることができる。この立場からその第一着手として、既にこれに關する多くの資料が現はれて居るのであるから、こゝにも專ら作業に依つて、時代と作品との兩面から成る統一の下に、各文學作品を自ら類從せられることをすゝめたいのである。

この手續の下に文學作品群を類從する方法及びその結果として成立つて居る分類法を批判することが

文學系列　できる。卽ちその形式的なるものは、散文・韻文の二分類、修辭學的なる四又は五分類であり、又形態的なるものは詩學の三分類及びそれを革新せる文學形態學の六分類等であるが、これを文學現象の共時的研究から見る時に、それ等の各方面をとり入れるとともに、それ等のいづれにも屬しない文學作品群のマップを畫くことができる。この作業に於て注意すべき事は、形式又は類型に依つて歸納的に統一することでなく、又單に

昭和六年七月十日印刷
昭和六年七月十五日發行

岩波講座 日本文學 第二回配本

編輯兼發行者
印刷者
東京市神田區一ツ橋通
岩波茂雄

印刷所
東京市神田區錦町
精興社

大森製本

發行所
東京神田一ツ橋通
岩波書店

岩波講座　日本文學

日本文學研究法（下）

垣内松三

岩波書店

日本文學研究法（下）

垣内松三

精神生活或は生活樣式の典型論に基づいて類從することでもない。言語形式（又は形態）と表現意志との交渉は多樣であるから、この兩者を維ぐ諸可能性を課題とするときに、言語形式又は文學形態學の方向は、表現意志に進入しなければならないのであり、表現意志から進出する方向は言語形式の尖端にまで及ぼさなければならない。この兩方面の偏向は共に文學形象の研究に於て公平であるとはいひ得ない。故にこの研究の目的に忠實であらうとすれば、文學形象の機構の諸聯關の裡に於て、この兩者を聯關せしむる諸可能性を對象とすることに依つて、その諸相を明かにしなければならない。單に言語形式に基づくところの散文・韻文の區別、文法的・修辭的區別、詩學的區別或は文學形態學は、この一面を受持つものであるとともに、制作心理的諸研究（種屬・典型・制作過程等）も他の一面たるに過ぎない。しかるにこの部門の研究に於ては、この兩者に屬する學說が、古くは支那詩學次に西洋詩學等が輸入せられて、文學分類の原理とせられるに至つたために、その傳統的考察に泥む便宜的方法に依つて類從が行はれて居るのみであつて、雜多の文學作品を秩序して、これを系統的に考察する用意が十分に整つて居ない。（このことは、國語教育學 Literur Pädagogik とも密接なる關係を有し、敎材の選擇・組織、解釋・作文の學習・指導の理論的基礎に參與するのである）しかるにこの問題は、兩者の諸聯關の經驗科學・精神科學的研究に依りて、その兩極的關係を明かにせんとする志向に於て、著明なる展開を打開しつつあるのであつて、一般に日本文學の研究に於て採用されて居る理論的根據と同じ視點に立つて居るのではない。故に先づこの課題に就いて、その主要なる事項を規定しなければならぬ。

言語形式又は形態學の基礎は敍述的機構 Dargestalte Struktur の上に立つものである。敍述的機構は主として、韻律的・文法的・修辭的なる言語形式に關する考察に依つて明かにせられる問題であつて、我が日本文學の研究に於ては、抒情詩の方面に於て、それ等の研究が展開し集積されて居る。

敍述的機構　言語形式に關する諸研究は、概ねそれ等の制作的研究の上から發達して、今日に及んで居る。しかしながら更に一歩を進めて、物語の作用の中に含まれて居る言語形式の問題、或は劇的表現に現はれる言語と所作との結合せる言語形式その他の問題の考察に就いては、最近に至るまで十分の展開を見ることができなかつた。歌格の研究のごときも、スタイルの研究よりは、その部分的なる考察に偏するものがあり、物語その他に於ても註釋的研究がその大部分を占め、全體に通じて樣式學的研究と見るべき注意を缺いて居る。

然るに文學形象の立場から見れば、それ等は概ね文學形象の空間性に關する事項（在來これを時間性と考へたものである）であつて、文學形象のオリエンチールングの一面を成すものである。なほ詳しくいへば文學形象の表現面の部分的考察に屬するものである。表現面に於ける一語一句が、一々に内面構造と密接なる關係を有する樣式的諸現象としての象徵的形式に留意するものではなかつた。かうした立場に於て、文學形象の諸相を秩序づけることは、既にその見解に於て限定され、狹隘なる拘束の下に自縛することであつて、文學の研究に於て所期する課題に近づくことを妨げるものである。

この限界を撤して、文學研究の課題に直面せんとすれば、單に表現面の上部に止まることなく、その表現面を掘り下げ、幾層かの表現層（空間性の層序）を深めて、個性的樣式の生起する根源にまで到達しなければならない。敍述

的機構の考察は、當然、創造的現象の中に入り込まなければならぬ。日本文學の研究に於ては、この方向に於て、常に二つの對立的態度を固執して讓らなかつた。

その一はその考察の方向を自ら限定して、專ら文學作品成立の文獻學的說明を試み、その二は表現層の探究を飛躍して、直ちに內實の問題に突入するものであつた。この對立的態度の統一は、その兩極的關係の分析を俟つて、始めて統一せられ融和することができるのであつて、一に表現層の次序を明かにする文學形象の時間性の問題に關はるところが多いのである。

文學形象の時間性（在來これを空間性と考へたものである）の問題は、空間性の表現層序の現象學的研究に於ける、空時的存在又は時空的存在に關するものであるが、その層序の深究に於て、（心理的時間性と意識主觀的時間性との交涉は後に讓る）到達する極限に於て、なほ意味と言表との對立を見るのである。この對立に基づく文學分類の反目は、こゝに至りても和解することができないのである。唯、ある作品の制作過程を語る作者の經驗、又はそれを示す資料の集積は、ある程度まで兩極的關係を明かにするのであるが、それだけであつて、なほ剩されたものがある。卽ちこの兩極を繫ぐものは、繫がれたものよりも以前に存在しなければならない筈であるから、單に「意味」と「言表」との二つの見方の對立よりも、敍述的機構の深底に在つて、その全體を個性的ならしめる「意義」の根源としての生產點は、空時性の統一として、敍述的機構の統率者として、考察の對象とならなければならぬ。

この課題に就いての試論は、旣に早くから文學美學の問題として現はれ、次ぎて生理心理的・社會的研究に依つて繼承せられ、更にそれ等の融合を求めて現代の樣式學的研究に至つて居る。この展開は作品よりは作家の制作意識現

象の分析を透して、再び作品に到達したことであつて、本質論的或は論理的に飛び去ることから研究を取止めると共に、經驗的感覺的に低下することからも研究の墮落を救つて、研究の對象の新しい把捉に導いたのであつた。かうした純粹內在的對象性の有する本來の二重機構は、意味と言表との對立ではなくして、意義と表現との關係に於ける不定性定位 Unbestimmtenstellen 又は存在規律 Seinsheteronomie の上に橫はるのである。

敍述的形式の上から文學作品を類從することは、敍述的形式が制作と批評の基準とせられる限りに於て認めることができるのは勿論であるが、もし一歩を進めて、いかにしてその基準が創造せられ遵奉せられるかの理由を求むれば、それは根本的なる基準となされる筈のものでない。又典型論的觀察が、作者の態度を規定して、作品の說明の上に及ぼされ、これに依りて作品の區別が行はれないこともないのであるが、それさへ、ある作者のある時の態度もしくは制作の現象であつて、一定不變の標識となすべきものでもない。唯、文學作品の裡に活きる意識現象を透して、意義と表現との結合の諸樣式を認むることに依りて、文學作品の諸相を明かにすることができるのである。ワルチェル Warzel が、茲に到達した時に、彼の試論は、文化形象と文學形象との相似性、特に建築樣式の相似性に依つて、文學形象の樣式學的分類を試みることであつた。我が文化形象一般特に藝術樣式と文學形象樣式との間にも、緊密なる關係が認められ、一方の樣式的特性は他の一方の樣式的特性と共通なるものを有するために、その相互性を明かにすることに依つて、一つの樣式の特性を顯著にすることもできる。特に歷史的現象としては、多樣にして複合せる聯關の統一を認めることに依つて、一時代の時代樣式又は樣式法則 Stilgesetz を抽出する可能性をも含むのである。しかしながら文化形象の諸相は各自にその存在狀態を異にするものであるから、茲に文學樣式の問題に就いても、その

特有の條件を無視して、概念的に一般文化樣式の下に、それ等を一括して取扱ふことはできない。文學作品に於ける直觀的世界の構成の樣式は、それに缺くことのできない諸條件の聯關に於て考察せられなければならぬ。卽ち「心」と「語」との相關に於ける敍述的機構の目的論的展開を明かにすることに依つて、樣式の諸相の統一を求めなければならぬ。この要求に近づくためには、なほ一二の問題を整理しなければならぬ。

その一は、敍述的機構の構成は、これを空間性と時間性との二つに分析して、それぞれの視點から作品を考察する可能性を有するのであるが、それは表現層序の集積であつて、表現面としての敍述的形式には、自らその內面的構成の形式が露出されて居る。從つて機構を統率する作用として、數概念が働きかけて居る事を知ることができる。卽ち直線的・相對的・函數的なる構成作用は、それぞれに特有の樣式を有し、在來修辭學的に考察せられたそれ等の特性は、單に敍述的形式の問題たるに止まらず、なほ進んで樣式學的に考察しなければならないのである。又その二は、それ等の特性は文學形態學的文學類型のそれぞれに働きかけて居るのであつて、その中にも、日本文學の研究に於て、多くの研究の累積されて居るのは、歌格研究の一面であるが、他の諸形態に於ても、その構成作用として、數概念の働きかけて居ることは明白である。而して奇數樣式、偶數樣式等の有する特性が美學的考察の對象として採上げられる時に、文學形態學の類型概念を離れて、心理的・世界觀的類型概念の一面から、文學樣式の類型が規定せられなければならぬ。文學史研究に於てその文獻學的研究が哲學的研究に衝動せられて、その融合面に於て樣式史に到達したやうに、文學系列の文獻學的統一も亦、哲學的研究の立場から動搖を感ぜざるを得なかつた。それは主として文學的個性に關はるものである。卽ち人間の根本形態又は觀念形態に就いての人間學的考察に依るものであつて、敍述的機

構の數的構成の內面には、別に心理的世界觀的動因の作用することを認めなければならないからである。こゝに於て「心」と「語」の聯關は、形式・形態の概念に依つて統一した類型の中に統一せられる文學作品群として類從せられるのではなく、心と語との聯關を緊密ならしめる精神的統一に於て規定せられなければならない。しかもこゝに精神的統一といふのは、文學的個性を意味するのであり、文學的個性とは分割することのできない統一であつて、敍述的形式でもなく、生活人としての作者でもなく、文學作品として結晶せる個性的統一である。眞に樣式と稱すべきものはさうした個性的なるものであらねばならぬ。この立場から見る時に現在所謂文學概論の慣例となつて居る類型概念の如きは、その根柢から崩れてしまはなければならぬ。然るに日本文學の研究に於ては、その學問的研究の出發點に於て不用意にもさうした類型概念を採入れなければならない狀態に置かれたがために、日本文學研究の本來の方向として持續されたる「心」と「語」との聯關に關する制作的・批評的體驗は、一たまりもなく打壞たれて、新たに輸入せられた學說と置換へられてしまつた。われわれが中世期に於ける文學論の中に立ちて、それを取戾さうとして居るものは極めて暗示的であつて、眞に本來の方向に振向ける牽引力たらしむるためには、現代に於ける精神科學の光に依つて、それを見直さなければならないのであるが、それは唯その說明的部分に關はるのみである、その本質に至つてはこれに何ものをも加へることを要しないのではあるまいかと思ふ。敍述的機構を統率する作用は執意的姿態又は定位或は境位とも稱せられる意志的作用に於ける自律的展開に於て求めなければならぬ。即ち敍述的形式或は形態に依る系列概念を基本とする文學形態學的方法ではたく、敍述的機構を統率する精神的なるものに置換へられなければならない要求を感ずるのである。かうした再構成的なる「再現」の文獻學的・歸納的・自然科學的研究の方法と、內

面的なる「表現」の美學的・演繹的・精神科學的研究の方法との對立は、日本文學の研究に於ては、單に對立として何等の整理をも試みられて居ない。特にその根本的なる文學研究の性格に關する自然科學的因襲と精神科學的要求との間に蟠つて居る疑惑に就いてさへ、それを解明せんとする意向が現はれてゐない。我が日本文學の研究の性格を堅實ならしめるには、先づこの根本的なる問題に就いて方法論的考察が現はれて來なければならない。そして方法論的考察の決定は、方法論を明確堅實ならしむる學としての哲學に求めなければならぬ。しかしこゝにはその問題に深入することはできない。唯精神科學的性格に立てる方法論の根本的なる問題として、對象と方法との規定に就いて、茫漠たる疑惑の中に残されて居る主要なる課題を採上げることにしたい。

文學作品の敍述的機構の「再現」としての感覺し把捉した個別的なるものを抽象して、これを類型化し、その類型化された抽象的概念を定義して、逆に個別的なものを統一せんとする模型論は累積されて居る。又さうした方法論的態度に依つて文學作品を類從した編纂は、圖書館の大半を充塞するものと謂はれて居る。かうした外面的・機械的なる學說の重圍に陷つて身動きのできないほどに研究的精神が壓倒されて居り、從つて方法論上の根本的態度も、自らそれに依つて規定せられて居る。これに對して文學作品の本質的なるものを直觀的に把握し、意識の內面に於て、これを具象化し個別化して敍述的形式の尖端に至るまで浸透せしめんとする方法論は、前者とはその對象と方法との方向を全く反對するものと見ることができるのであるから、それを抽象的觀念論的のものとして排斥せられるのであるが、以上の二つの方向が反對の思惟形式を展開せしむることは、兩者の形式的一致を保有することであつて、前者に於て具體的から抽象的に向ふ方法論的規定と、後者に於て抽象的から具體的に進む方法論的操作との區別は、その相

反する二つの方向にあるのではなくして、實は抽象化と具體化との段階との差異に依るものと見ることができる。そしてこの立場に於て、兩者に共通する對象を分ちて、（一）獨創性（二）人間性（三）沈潛性（四）完成性の四とし、又方法論的には、それ等の意味統一卽ち目的聯關を批評的理念又は價値判斷の內面的形式として採入れることに依つて、方法的・思惟的操作と對象の本質的展開とを相互に聯關せしめ抗爭せしむると共に、それの聯關を緊密ならしむることに依つて、方法論的純粹性と統一性とを保たんとするのである。その結果として、樣式概念の四つの問題が現はれて來る。卽ち（一）獨創的精神性（二）典型的精神性（三）文化時代性（四）文化・藝術科學的（イ）形成作用（資料）（ロ）典型的（情趣）（ハ）傳統的（構成）樣式概念であつて、それ等の目的聯關は、常に文化・藝術科學的樣式概念に向つて展開して已まないのである。從つてこれを研究の對象とする時に、その方法論的性格は、研究者自身と客觀的所與との抗爭の間に、不斷に展開して已まない樣式概念を戰ひ取る強靭性にあるといはなければならぬ。故に文學形態學的類型概念の內面的樣式性に於て、文學形態的類型の諸相を統一することに依つて、たとひ如何やうなる類型概念に基いて、いかやうなる類型の中に押込められて居る文學作品の研究に當りても、その內面的機構を究明する目的論的動機を確實に保持しなければならぬ。先きにその兩者の關係を分析して「言語」と「事實」と「精神」との相關とし、その相關に於ける分裂示標としての「契機」に立ちて研究の方向を規定したのであつたが、その兩面の一としての「意味」として把握せられた統一を、更に「意義」と聯關せしむるために、一切の偏向を統制して公正なる努力をいたさなければならぬ。卽ち意識せられたる「再現」を保留すると共に、「表現」として直觀せられたる假說を具象化することに依つてその抽象化を避け、「意味」と「意義」との中諦に立ちて、「創造的個性」の展開の委曲を盡

して、象徴的形式としての文學作品の本質を明かにしなければならぬ。方法論的考察に於ては、更にそれを統一して研究の方向を秩序づけるために、樣式概念の「系統」を整備する要求を生ずるのである。

文學系統　文學形態學的類型と生理・心理的、世界觀的典型論との對立を克服して、その中諦に定位せられる文學樣式學の考察は、美學的、藝術科學的、文化史學的、或はそれ等の聯關に依つて構成せられるのであるが、その考察の過程は、日たほ淺きがために、その系統的、方法論的・統一的、批判的定義を求むる事は頗る困難を感ぜしむるほど、これに關する學說に就いては相反する方向と論難が見出されるのであるが、これを大別すれば（一）藝術科學的、（二）文化科學的なるものの外に、更にその第三段階として新たに生活樣式 Lebensstil を取入れるに至つた。それは、在來この考察に當りては「表現」と「再現」との聯關を確實に把握することが困難であるために、時として學說の全面に亙りて混亂を生ずるものがあつたのを避けて、「心」と「語」との相關を統一する「創造的個性」に依つてそれ等の綜合を試みるためであつた。こゝに方法論的に文學樣式の系統を求めるに當りても、この最後の考察から、その他の學說を統一することを以て至當の順序と考へる。

この順序を採るに當りて、樣式學に於ては先づ豫めそれ等の諸方向に於て、慣用せられる用語と、この目的に應じて用ひなければならない術語との區別を明かにするために、Idiomatik の問題を先行せしめたければならない煩累がある。それは文學形態學的・外面的觀察の慣用語たる詩・散文、抒情詩・敍事詩・劇、又は抒情詩・哲學・記述・表出等の術語と、文學樣式學の目的から規定せられなければならない術語とは、三重の意味に於て、基本的概念を異に

する思惟の中から産出せられるからである。三重の意味といふのは、敍述的機構に於ける左右・前後の外に、内外一如の象徴的關聯を基本とすることである。その近似せる關係に於て、思惟の展開の間に、自ら同一術語を用ひて、相異せる意味を擔當させせなければならない狀態にあるがために、方法論的にはその基本的概念を異にするに關はらず、同一の術語を用ひて、相異せる思惟を展開せしめんとすることが、方法論的敍述に於ては、幾多の混亂を生ずる缺陷の在ることを被ふことができない。故にこの要求に適應する術語の制定は、思惟を明晰ならしめる爲に必須の用意であるが、それを分明に裁斷することのできないのは、一はその慣用的惰性と一はその考察の日の淺いためである。玆に文學系統を考察する根本的態度は、いふまでもなく後者の基本的概念に立つものであるから、その術語に於ても、それに副ふものであらねばならないのであるが、日本文學の研究に於ては、樣式學の研究に於て、周到なる用意を以て、術語を苦心する度合とは、多少趣を異にするものがある。その一般的用語は多くは所謂文學概論の飜譯的術語であつて、これに比して我が歌論・俳論等の術語的用語は遙かに目的に恰當するのであるが、學術的用語として發達して居ないために、部分的には正當と認められる用語であつても、直ちに術語として採用するのに躊躇せしむるものがある。故にこゝには不本意ながら、考察の目的に副ふ用語を用ひて、敍述を進めなければならないが、術語の問題は、我が日本文學の研究に於ても、その學問的性格を正しくするために、方法論的考察を缺くことはできないのである。そしてその着眼點は、創造的個性の展開を基本的概念とするものであることを確保しなければならぬ。

「創造的個性」に依る文學樣式の系統論 Systematik は「生活樣式」の考察を以て根據づけられたる、文學樣式に關する諸方法論の統一要求である。「生活樣式」の本來の問題は、諸科學がそれぞれの立場から人間生活を考察する

ところの、その孰れかの一角から規定せられたものではない。生活の「流儀」とでもいふべき様式は、生物的個人や、社會的人間の生活狀態からは區別せられた、全く特殊な獨自な定位づけに依りて、對象的意義を獲得するのである。それは「自我」Ich と「全一」Alls の二つに區別し得られるのであるが、それは不斷の教養に依つて、憧憬の充足を感ずる精神的關聯を示すものであつて、こゝに客觀的に「生活樣式」として示されるものは、その個性形成の法則的・對象的統一である。故にこの精神的關聯の根柢としての人間生活の內面に於ける原始性とそれを抑壓せんとするものとの抗爭は、それぞれの志向性（反情・同情）に沿うて淨化せられ又は深化せられ、又は一世代文化圈の、民族の歷史的統一性の樣式形成にも參入する道程をも示すのである。不定的定位といひ存在規律といふのは志向線を連續する點の無限の方向を誘導する作用であるが、それがいかに複雜强烈であらうとも、「創造的個性」はそれがために滅却せられない元初の一念たることを示すのである。「創造的個性」に依る文學樣式の系統はこの立場に於て規定せられる。そして、「自我」と「非我」との關係を透して、「全一」に向ふ形成作用を說明する用語として、「返照」Reflexion が用ひられる。今はそれを採上げて見ることにする。

　生活樣式は感情（こゝに用ひる術語として）に依りて形成せられる。「返照」といふのはその形成作用の比喩的語面としてよりも更に精しく形成作用を示したい希望を含むものであつて、これを更に外返照及び內返照に區分する時には、それぞれの意味を受持つこととなる。たとへばわれわれはよく夕方に或る家の硝子窓が夕日を映して眞赤に輝いて居るのを見ることがある。又日が落ちて燈火の光が窓から流れて、外を照らして居る光景を思ひ浮べて見るとする。前者の反射のやうな場合を外返照といふのは、外界の刺戟の直下の反映を現はすために用ひるのであつて、一般

には「感情」はかうした作用と考へられて居る。後者を內返照といふのは、外から迫る刺戟を內省自照する意味を示すのであつて、一般には「思惟」はかうした作用と認められて居る。感激から沈潜へ、又懊惱から自證への道程は、一見對蹠的關係に立つもののやうに考へられるけれども、この二つの生活様式は相卽相入して一切を照らす光源を求める。前の二つを「自我」Ich の生活様式とすれば、後の方は「全一」Alls の生活様式として區別することもできるが、前にも述べたやうに、後者は前者の究竟であるから、後者は前者に對して、無限の復歸と共に無限の展開を含むものとして定位する。かうした假設に於て、それを文學様式の考察に進める時に、文學作品は三つの系列に於て秩序せられることを見るのである。

その第一系列は、人間の原型 Urbild 故鄕 Heimat 宇宙 Kosmos として、眞實なる存在の寶玉として輝くものである。この類型的慣用語の幾群があるが、それ等の示すものは孰れも過不及を免れない。故にこゝにはもつと一般的に文學作品の特性を示す慣用語的なる文學作品群としては、先づ童話・民話、童謠・民謠、諺、民衆劇等に屬するもの、國民的英雄を語るもの、祝詞の如き、一民族文學の原始時代から傳誦せられ、記錄せられて、いつの代の子供も大人も一緒に讀み、子供は子供のやうに、大人は大人のやうに、それを樂しむものを數へることができる。これを更に擴めていへば國民文學から見たる世界文學もこの中に含められる。卽ち各民族文學の最高峯に立つ文學作品であつて、各國語に飜譯され、時代と方處を超えて、いつでもどこにでも讀まれる文學的經典といはれるものである。最も廣い意味に於て、「公衆」の批判に依つて支持せられる作品である。

その第二系列は個人的主觀的なる感情の發露としての文學樣式である。その代表的なるものは詩歌であつて、日本文學に於ては、この系列はその主流をなすものとせられ、その分派としてのそれぞれの樣式も亦相互に聯關して多樣にして多彩なる展開を持續して居る。それと共にその音樂的要素は、「謠ひもの」としての一面に於て、自ら一の系列を成し、他の一面に於ては、その說話的要素が、「物語」としての一系列を作り、それぞれに獨自の展開を示して居る。

その第三系列は、思惟的、客觀的なる反省の記錄としての文學樣式である。その代表的なるものは隨筆であつて、各時代を通してさうした斷想の記錄の展開を見ることができる。その敎訓的要素は、「語りもの」としての一面に伸長し、又その評論的要素は、「記」としての敍述の方面に進出する。

この第二系列中の「謠ひもの」の調と、第三系列中の「語りもの」の響とが合流する時に、その複雜なる機構を整へて、言語と行動との樣式として、特殊の展開をなし、又第二系列中の「物語」の仕方と、第三系列中の「記」の方法とは融合して、人間を描く極めて自由なる樣式として展開する。なほ更に第二系列全體と第三系列全體とは、各々その多樣なる分裂的展開を收拾して本來の目的聯關の下に、第一系列に向つて復歸する。それは再び人間の「原型」を求め、「故鄉」を愛慕し、「宇宙」を展望せんとする作用に外ならないのである。

「自我」と「全一」との生活樣式の聯關と、文學樣式の上に於ける統一と分裂と統一との聯關との間には緊密なる連續性を見出すことができる。文學樣式の系列の精神科學的統一を求むることは、創造的個性の意識現象の分化を系統する事に外ならないのである。文學史研究法に於て、その時期區分の方法が單に便宜的であるために、歷史的認識を不明ならしめることを感じて、方法論的基礎に立ちて、文學思潮としての日本文學の本質的なるものの展開を考察したのであつたが、所謂文學概論に於ても、その文學作品の分類は隨意的である。學問に於て分類を必要とするのは、研究の目標を明かにして研究進行を容易ならしめるためであつて、その目的に副ふことのできない分類の如きは、無用の戲論である。こゝに創造的個性の展開を基本とする樣式學的研究に依り、一般に行はれる錯雜分類を避けて、文學樣式の有機的聯關の中に、その各系列の系統を尋ねたのであるが、文學作品の研究の實際に於ては、各研究資料に卽して、この方法論的實證を試みなければならぬ。それは一に解釋學演習の實習に依るの外はなく、以上分類した各系列に屬する文學作品を選擇して解釋する時にも、その演習を透してなしうる限り研究を廣め且つ深くすることを力めなければならぬ。今や註釋その他の參考資料は一般に普及して、その水準に於ける研究は、苟くも文字を知るものの解するに苦しむものではない。眞に日本文學を研究する目的を把持する人々に於ては、それよりも更に高まる研究の方途を擇ばなければならぬ。（二一—二四頁參照）

こゝに三たび形象作用に就いて文學系統の問題の統一を試みたいと思ふ。（二四頁參照）

形象作用　文學系列の問題は中心を異にする多樣なる問題圈 Problem Kreise の交錯せる切點の上に見出されるの

であるから、幾多の類概念學說のいづれにも從ふことができないと同時に、又そのいづれをも統制し得る定位に据ゑつけなければならぬ。この方法論的分裂の統一を求むるためには、それ等の學說の限界を明かにし、又、各學說が交渉する接觸面に於てそれ等の放散を抑止しなければならぬ。そしてこゝに考へ得られる可能的統一は、創造的個性の精神史的展開又は人間性の哲學的考察にあることを見た。これをいひ換へれば、人間性的「全一」の理念は、幾多の學說を統率して、それ等を樣式概念的・典型的精神性として、緊密なる秩序の裡に把握するものであることを論證したのである。精神史としての文學史（文學思潮）に於ては、それに依りて始めて方法論的に、「時代」と「樣式」とを統一する可能性があることを述べたのであるが、精神科學としての文學概論（文學系統）に於ても「系統」と「系素」とを明かにする可能的なるものとして、進んでその法則を見出さなければならぬ。こゝに三たび形象作用に就いて、この一角から論證を試みるのは、更に「文學理論」の方法論的考察に躍進せんとする問題設定の豫量を含むのである。

既に述べたやうに、文學樣式は純粹感情の個別的對象性に向けられたる形象である。形象作用こそはそれを統制する原理であつて、文學研究の二重性のいづれにも偏向することは許されないのである。敍述的機構は樣式的現象であり、樣式的現象は形象的機能の持續的統一性の上に見出されねばならぬ、又文學樣式は純粹感情の「相反」から成立する。既に原始文學に於ける原型から、歷史的時代の流動に沿うて、かうした反動が樣式形成の因子であつた。それを示す各種の術語たとへば、「素朴的」と「情感的」、「アポロ的」と「ディオニソス的」、「古典的」と「浪曼的」等々のごとき美學的・文學史的相反は種々の徴候・契機・動因等から抽象せられ、集積せられて居る。それ等はこれを一括

して問題構成的・問題史的なるものとして統一することができるのであつて、相反の動因こそはそれより以前に位置するものでなければならぬ。故にこゝに更に進んで、「充實」の問題が提起せられて居る。それは感情作用の兩極たる「反感」と「同情」（厭世的と樂天的とではない）との特殊性の上に於ける形象作用を示すのであつて、「悲劇」と「フモール」とはその典型的なるものである。それ等はその展開の極致に於て明朗なる心境に到達する。さうした創造的なる原學揚者 Urheber は、錯覺・幻覺を排除して、實在性の上に立つ充實的憧憬である。文學様式に關する紛糾せる學說の歸趨は、これを憧憬の充實と完成を求むる形象作用に於て統一することができるのである。

形象作用の機能の中に包括せられる形象資料・形象方式・形象構成（文學形態學的諸概念と絶縁されたる）の諸問題は形象能力、內面的動力性、形象的綜合力として、直觀的世界の構成作用の、持續的展開の動力としての「創造的個性」の中に總括せられるのである。これ等の諸問題は、文學の研究に於て、本質論的・形而上論的抽象化に陥ることから、その本來の目的を確保して、文學作品の具象的研究を把持せしむる契機に立つのである。たとへば一語一句の解釋に於ても、それを個々の斷片として取扱ふか、全一體に於ける部分として取扱ふかは、文獻學的技巧と文學科學的思索との機微なる分界線に立つのであつて、極めて微小なる精神的動搖も、その定位を偏傾せしむるに足るのである。故に方法論的考察に於ては、形象作用の意識現象の現象學的分析と統一との原理に立ちて、常に（一）獨創性（二）人間性（三）沈潜力（四）完成力の關聯的・持續的展開を緊密に秩序することを怠ることはできない。それは文學理論の研究と俟ちて、文學作品の解釋に於て修證を要すところであつて、文學作品の文獻學的註釋は、その他の一面と平衡を保たなければならない地位に置かれて居る。

以上、文學系統研究の諸問題を統一して、形象作用に綜括した。こゝに再び回顧したいのは、文學史研究法に於て、樣式史に到りて足を停めて、他の各章との理論的關聯を殘して來たのであつたが、(二九頁參照)こゝにも樣式學に於て考察を中止し、第一章の終に於て足踏みをして居る方法論的考察の間近に立つて、共同の方向に向つて、その進出を止めて居る。こゝに樣式史と樣式學との關聯に就いて、更に考察しなければならない機會に立つた。

先きに文學史研究法に於ては、文獻學的方法と哲學的方法との對立が、文學作品の歴史的研究としての樣式史に於て統一せられなければならないことを述べたのであつたが、文學系統研究法に於ても同じく、文獻學的方法と哲學的方法(美學的・心理的・世界觀的)との對立が樣式學に於て止揚せられなければならないことを見た。然るに日本文學の方法論的考察に於ては、その二つの對立の統一の要求は、更に研究の實際に徵して整理しなければならない事項を殘して居る。これを三つの方面から考へて置きたいと思ふ。

その一は、日本文學に於ける樣式學的研究の大部分は文學系列の書史學的研究であつて、その基本的概念は、文獻學的・文學形態學的である。それ等は研究の展開の極限に於て、樣式史各說として樣式史通說と融合すべきものであるが、この兩面はその獨自性を保持すると共に、日本文學の文化史的・藝術科學的展開の研究に融合されなければならぬ。文學史研究の方面から、文學系列の研究を取入れることは、その共時的截斷としての社會層・時代層の研究を正確ならしむる必然的要求であつて、唯異なるところは各文學樣式中のいかなる樣式が(文學形態的類型でない)一代を支配して居るかを目標とする點にある。又文學系統研究の方面から、文學史を顧みるのは、一時代の文化史傾向

に依りて、文學系列の諸相と、文學樣式の特性とが、いかに影響せられるかを明かにしなければならないからである。この相關に於ける日本文學の研究の現狀は、それが樣式法則にまで高められることなく、全體に於ても、部分に於ても、各孤立の狀態にある。

その二は、日本文學の研究に於ける樣式學研究の僅少の部分は、文學形式學・詩學（時としては修辭法まで低下する）・文學形態學に屬するものである。それ等は概ね所謂文學概論に依つて輸入せられた飜譯學說であつて、日本文學の樣式學的研究の自由なる進展が、それに依りて停頓させられて居ることは方法論的考察の上から見て看過することのできない現象である。前にも述べたやうにさうした學說は既に一世紀以上も持續されて居る美學的・心理的・世界觀的學說に依つて粉碎されて居るのであつて、それ等の學說は、日本文學の研究者の側からは顧みられて居ないとしても、學界の一面に於て、それ等の學說が關心を持つて研究されて居ることを、氣づかないやうに振舞ふことは許されないであらう。況んやこの對立せる學說が次第に和解されて、樣式學 Stil-wissenschaft としての體系が成立されて居ることを無視することはできないであらう。以上の理由に依つて、文學史研究法に於ては、既に僅少の素樸的なる樣式史的研究を有するのであるが、文學系統研究法の側からは、日本文學の樣式學的研究は行はれて居ない。從つてこの兩方面はそれを連結する端緒をも見出すことができないのである。このことが單に文學研究のみならず、國語教育の諸問題にも重大なる缺陷を殘して居ることを指摘して置きたいと思ふ。

その三は日本文學の研究の現狀に關しては、全く夢を語るの愚に近いのであるが、樣式史と樣式學との融合として の形象學に於て、文學史研究法と文學系統研究法とは、現行學課科程のやうに、日本文學史と文學概論として駢立す

（實際は孤立して居る）るものではなく、各々文學理論の各部門としての機能を分擔して、日本文學の文化史的・藝術科學研究統一を堅固ならしめなければならないのである。私見としてはこれ等の各部局に於て補塡されない缺陷を殘存して居るとしても、それ等に頓着なく、先づ研究の方針を確立して、研究の進展の間に、自然にそれ等の空虛を充實せしむるやうに進展の方向を定むべきではあるまいかと考へる。玆に日本文學研究の方法論的考察に於ては、それが現狀といかなる關係に立つものであらうとも、その爲すべきところを更に進展せしめなければならぬ。卽ち文學形象の機構の理論的考察は、樣式史と樣式學との融合を對象として研究すると共に、更にそれ等に働きかけることに依つて、文學研究體系を確保する豫量の下に、その方法論的方面を考察しなければならぬ。

第三章　文學理論研究法

文學研究法の性格は、一般精神史的・精神科學的規定としての方法論的考察の外にあることはできない。さうして、文學理論の研究に於て、その對象となるものは客觀的形象である。故にその客觀的認識の方法論考察に於ては注意の特殊の作用に依つて、可視的形象の全現象が象徵的に集中せられ、同時的に集成せられるやうな基本的形式と基本的方向とを規定し、さうした用意の下に、基本的形式と基本的方向との間に精神的編入が成立するやうな內面的聯關を求めなければならない。この目的を達するために先づ象徵的形式の分析と統一とを試み、その基本的形式を明かにしなければならぬ。象徵的形式に於てはさうした基本的形式は實在性の

象徵的形式

分析と同一であることを求める。故にこの基本的形式に基く基本的方向の規定は、實在性の推論的方向を展開せしめ、文學の本質の研究の方向を求むることである。

象徴的形式の基本的形式を分析するに先ちて整理しなければならない問題に就いては、既に簡單に註記したのであるが、茲に對象として規定せられる文學作品の集成的形象の現象的實在性は、在來の心理學的說明に於て取扱はれた、「繼續性」と「同時性」との理論とはその立脚點を異にするのである。心理學的說明に於て繼續的なるもの、從つて時間的なるものは、敍述的形式の敍述的時間性を示すものであつた。又その同時的なるもの、從つて空間的なるものは、敍述的形式の敍述的空間性を示すものであつた。併し乍ら敍述的機構の基本的形式は、その方位 Orientierung としての空時性に於て規定せられるのである。卽ち文學作品の可視的敍述面は空間的である。故に心理學的に繼續的（時間的）と考へられるものは、茲に於ては空間性と認められる。又文學作品の敍述面はそれを表現作用の展開の極限として見る時に、幾層かの表現層の內面に連續せられる空間性の集積を見るのである。故に心理學的に同時的（空間的）と考へられるものは、茲に於ては時間性と認められる。象徴的形式の空時性は心理學的空間性及び時間性とは異れる構成原理に於ける基本的形式である。更にこゝに一歩を進めて考察しなければならない課題は、心理學的空時性と對照して考察した象徴的形式に於ける基本的形式としての空時性はその機構を示すのみであり、象徴的定位の術上的斷層の特性として、空時性の表現層の上に、「數」概念 Zahl-begriff が認められる事である。卽ち「一」「二」「三」の如き「數」概念に依りて空時性の全面に於ける機構が集成せられて居る。この事は心理學的には僅かに制作過程の研究に於て、表現層の過程が心理的時間的に考察せられたに止まり、文學作品の空時性の結晶樣式には到らなかつた。

象徴的形式の基本的形式の分析が明かにし得る成果は、空時性を統率する結晶様式即ち形象作用を透して創造的個性の深奥に穿入する一路を拓くことである。即ちそれは「再現」を「表現」の契機まで深めることに依つて、客観的認識の進展をその極限としての、象徴的形式の彼岸に於ける（一）獨創性（二）人間性（三）文化時代性（四）文化史的藝術科學的特性を包括せる象徴的定位を象徴的形式に連結せしめ、かくして象徴的形式を中心とする旋回圏の上に、文學理論を考察せんとする基本的方向を規定せんとすることである。象徴的形式の基本的形式の分析は、同時に方法論的考察に於ける基本的方向の分析と等位に立つものであることはいふを俟たないのである。故に基本的形式と基本的方向との間に於ける精神的編入は、象徴的形式の機構に即して行はれなければならないのである。

こゝに附言しなければならないことは、日本文學の文學理論的考察に於ては、制作及び批評の示標として、歌論及俳諧等に叙説せられて居るところの若干の名辭の存在することは、既に他の場合に於て論述したことであるが、それ等は單に示標として指示し得るに過ぎないのであつて、それ等の記錄の書史的・解説的叙述を以てこれに充當せんとすることは模型説的態度に歪められることになるのである。日本文學に於ける文學理論の方法論考察は、様式史と様式學との研究を止揚して、その根柢に於ける理法を求めることであらねばならぬ。從つてその目的を達するには、象徴的形式の基本的形式を考察して、その基本的方向を明かにすることを目標としなければならぬ。

基本的形式

嚮きに文學作品の叙述的機構に於ける基本的形式を分析して、空間性と時間性と及びその集積（空時性）とを見たのであつたが、それ等は文學作品の再構成的體驗即ち「再現」の分析であつて、他の語

でいへば、文學作品の敍述面としての延長（Strecke 幅）と、その層（Phasen 深さ）と、更にその二つの集積（Mass まとまり）とを示すものである。然るに敍述的機構の特性を成すものは、こゝに止まらないで、なほこの外に、集積を緊密ならしむる作用としての、緊張（Spannung ひきしまり）を加へなければならぬ。これ等の頭字を以て、全體の機構を示せば、S×P×M×SPの集積である。この式に於ける各符號は敍述的機構を分析して、その要素を示すに過ぎないのであつて、この式はこれ等の要素が相互に依存して全體としての結晶を成すことを示すものである。然るに更にSPの根柢には、迫力（Kraft ちから）が無ければならぬ。こゝにS×P×M×SP×Kとして、初めて敍述的機構の全體が示されるのである。われわれは文學作品を解釋して、これ等の諸條件の下に、その研究が遺漏なく行はれる時に、こゝに文學作品の原集積（Urmass）が意識の中に再現せられるのである。さうして原集積は潛在力として、以上の方向を轉回して、逆にK・SP・M・P・Sの順序に從つて敍述面の尖端にまで滲透する方向を採る動力となる。これを Kinematische Synthese と稱する。その意味は展開の動力を含む靜止的狀態に於ける綜合を示すものであつて、こゝに敍述的械構を示す諸要素は表現的機構の要素として性質づけられ、表現層の中軸をなすものは、具體的時間、卽ち時空性として、一切の要素を統率するのである。

敍述的機構と表現的機構との基本的形式は同一であるが、解釋の方向の相異は、それに依つて構成せられる諸法則をも變更せしめ、こゝに一例を擧ぐれば、敍述的機構に於て、「言語」と稱するものを慣用語的用語として區別し、別に表現的機構の立場からは「言葉」を用ひて、その意味を擔當せしめようとするごとき精微なる思惟が作生するのである。このことは文法・修辭法・詩學等の慣用語的術語の一々に就いて見るも、各々その兩面を有するのであつて、

特にそれを區別するために、「慣用語的」といふ語を冠らせて、さうでないものとの區別を示すことが行はれて居るほどに、二つの方向の相異が著しく際立つて居る。文學の研究の實際に於て混亂を生ずる場合は概ねこの立場を明かにしないでそれ等を混雜せしめることに因るところが多いのであるが、更に兩者の諸要素の全體に行き渡らないで、その一部に立ちて、他の一部と對立する時には更に混雜が甚しい。解釋の相異といふことは、十分に手續を盡さない立場の相異から生ずる偏向の對立であるといふこともできる。文學研究の實際に於てこれ等の混雜を如何に整理すべきか、又それに依つて構成されて居る理論を如何に秩序すべきかといふことは、一にKの研究を深化することに依つてこの問題を解決する一路を打開することに關はつて居る。象徵的形式の基本的形式といふのは、この立場から見出されるのである。

表現的機構の中軸をなす時空性の動力としての潜在力は、敍述的機構の立場からいへば、零位（Nullpunkt）である。然るに表現的機構の立場からいへば、內に力を含む靜止的位置である。故に零位即ち「無」は「有」を含める「無」である。と同時に「有」を産む「無」である。敍述的機構に於ける經驗的空時性は「有」を含める「無」の影であると同時に「無」を透して見る「有」の形である。故に「無」の奥に見る實在的世界の構成を明かにする要求は、哲學的考察に依つて文學理論の一面を展開せしめたのであつたが、研究資料としての文學作品に卽して、その研究を推進することを目的とする立場に於ては、本體論的又は抽象的考察にのみ走ることなく、Kの研究を深化する方向を把持しなければならぬ。この方向に沿うてKに統率せられる時空性の極限が、「原集積」として把握せられることは前に述べたところであるが、「原集積」は、基本的運動・基本的緊密性・基本的操作の綜合であつて、主觀と客觀との橋梁で

あり、又精神と自然との融和である。故にこれを Dynamische Synthese と稱する。その意味はこの原現象に於て、そこに自覺的統一を見ることができるからであつて、そこより展開する意識主觀的時空性は具體時であり人格時であり、それは直ちに實在の形式と見ることができるからである。卽ち象徵的定位と象徵的形式との關係に於て象徵的機構を統一する作用は、「時」であり、「時」こそは象徵的形式の基本的形式と見ることができる。故に文學理論に於ては「時空性」の考察に依りて樣式學及び樣式史を更正して、これを形象原理に統一せんとする必然的なる進展を見るのである。

基本的方向

以上の基本的形式に於て、その根柢に自覺的統一の存在することを見たのであつたが、基本的方式の問題が、そこに根源を有することはいふまでもない。しかし文學理論においては、文學作品の研究を基礎とするものであるから、それより以前に先づ、文學作品の集積に於て一般に行はれて居る數秩序 Zahlznordnung に目をつけるのである。卽ち文學作品の上に行はれる數概念は「一」・「二」・「三」（奇數・偶數及びその倍數）等に統一せられるのであるが、基本的形式はこれ等の數秩序に依つて統率せられ、それ等は原集積から經驗的空間の尖端に至るまで恰も衝上斷層のごとく集積を貫いて居る。この現象に基づいて、こゝに基本的方式の三つの方向を見出すとともに、その三つの方式が、それぞれ自覺的統一に立つ直觀的世界の構成と關係あることを認めて、こゝに樣式學及び樣式史に於ける基本的方向を明かにして文學理論の考察を進めんとするのである。

樣式學に於ける系統原理として、自我と全一との關係に於ける純一と分裂と統一とに基づきて、各樣式の特性を見

たのであつたが、それは直ちに文學作品の原集積に働きかける人格的座標又は象徴的定位の特性を示すものであつて、「一」・「二」・「三」等の數概念又は數秩序が經驗的空間の上に認められるのは、その根柢に於て原集積に働きかけるこれ等の基本的運動・基本的緊密性及び基本的操作のあることを示すものである。從つて文法・修辭法・詩學等主として敍述面に於て考察せられたる慣用語的術語に依つて示されて居る理論はこの立場から見る時に、殆んどその全面に亙つて更正を促されざるを得ないのである。「一」の展開としてのテーマ・觀念・情趣の流動は、回顧的に展望的に一語一語が呼應し反響して直線式に進展する形象の上に見ゆる、言葉の線の上に於ける强さ和かさ圓みの如き筆觸、又それ等の遞減遞增する語勢、又は反復・かけ語の如き語趣、又「二」の展開としての駢對の上に見出される平衡から現はれる對照・齊整等の言葉の網中に於ける美しい調和や惱ましい背反、又「三」の展開として見られる複雜なる比例の上に確保されたる中心に依つて描ける言葉の渦の中に於ける流動の姿のごときは單に敍述面に於ける形式として見過すことはできない。これ等は更に慣用語的抒情詩・敍事詩・劇等に於ける諸相及びその分化をも統一する原理として見ることもできる。特に、樣式學の立場から精しく考へなければならないのは時空性に關する問題であつて、無限なる作用の連續としての永遠の實在の形象こそは文學理論に於て最も關心を有する問題である。

　樣式史に於ては數概念又は數秩序を自我と全一との關係に於ける展開の上に見ることができると共に時代樣式に於ても、これ等の數概念が文化形象一般の時代樣式、特に藝術一般と關聯して文學樣式に於ても交互に連續して、その展開を統率するのを見ることができる。卽ち直觀的世界の構成としての形象の展開の考察は、社會史・種族史的・精神史・新列傳的・作品史・樣式史等これまで試みられたる有ゆる文學史論の統一として、それ等を包含するものであ

る。故に「文學史」は文學形象の展開の考察として理論的に基礎づけられねばならぬ。この立場に於て慣用語的「文學史」及び慣用語的「時代區分」とは區別されたる見方を要するのであつて、「文學史」の理論的考察は自らその方向を異にしなければならぬ。（第一章參照）その中心の問題となるものは「詩人肖像」の名を以て示されて居るやうに、作者の精神の内面に於ける「原現象」に於て、直觀的世界の構成としての形象の展開を見ることである。これと關聯する研究は、精神分析學・血型學・人間學等に於て存在規定が究明せられるやうになつたが、それと「原集積」との間又、更に「原集積」と「集積」との距離は近づけられて居ない。われわれとしては、却つて文學作品を精しく研究して、そこに作者を見ると共に、又文學作品の奥から話しかける作者の聲を聽いて、それが時代精神律動との間に、いかなる役割を受持つかを知るために、文學作品を離れることなく、その研究を深めると共に、そこに他の側からの注意を採上げて精神的編入が自由に行はれる餘裕を保たなければならぬ。從つて個々の文學作品の研究の立場から正確に見出される數概念及び數秩序的基本的方向に依つて、「原集積」の諸相を明かにすると共に、その歴史的時容性を明かにするために、徹頭徹尾、文學作品の解釋を鋭くすることに依つて、その基本的形式に基づいて文學史理論の研究を秩序づけなければならぬ。それは今後の研究に於て最もアンビシヤスな問題であり既にその端緒は見出されて居るのである。

形象作用　こゝに四たび形象作用に就いて以上の考察を要約したいと思ふ。既に第一章及び第二章に於て各々その研究の基本的形式及び方向として、樣式史及び樣式學の根柢に於て、形象作用を見たのであつたが、こ

こに本章に於て、それは創造作用の「原現象」(Urphänomenon)であることを明かにした。原現象は個個の研究から歸納せられたる概念ではない。原現象は文學作品の內奧に於て見られる統一的意識現象卽ち「原創造」(Urschöpfung)である。その根源と特性とを探求するのは現象學の研究事項である。われわれはそこに空間的・時間的統一としての對象的結晶作用に於て、空間に於ては「ここ」、時間に於ては「いま」及その集積に於ては「われ」を見るのである。又「ここ」に對する「そこ」「かしこ」、「いま」に對する「前」「後」、「われ」に對する「汝」「彼」との關聯に於ける意識統一の結晶作用の基礎を知ることができるのである。精神生活の具象的基本形式は「われ」に依つて統一せられる、その固有の「行」の形式である。その統一の統一は唯純粹直觀に依つて把捉せられ得るのであつて、われわれの課題に於て最も本質的なる深遠なる問題は、純粹直觀の元初の一念に立つて、眞實なる形象作用を理會し意識することである。

こゝに再び様式史と様式學との關係に於て慣用語的「文學史」と慣用語的「文學概論」との間に於ける統一を求めることができるのである。現在の學風に於てはこの二つの關聯は全く隔つて居るのであるが、それは單なる研究史的事實であつて、その各系列は「學」としての體系の下に統一されなければならぬ。その體系的統一に於て、各系列の研究は各々その固有の方向を生々と展開せしめることができるのである。卽ち様式史は、その內に様式學的研究をとりこめて形象作用の展開を探求する學問として、その統一を確保するために、様式學に於てこれまで「文學史」から離れて各文學系列の歴史的研究に分裂されて居た諸研究を様式史の中に編入し、又様式學に於ては單なる形態學的・典型論的研究として無統一に行はれて居た諸研究を秩序して、形象作用の現象を研究する學問としての統一を求むる

ことに依つて、文學作品を研究する各部門を方法體系の組織の中に於て、それぞれの機能を發揮することができると思ふ。形象作用の研究こそはわれわれの研究の對象と方法とを規定する中樞に立つものといふことができると思ふ。

結語　形象と理會

方法體系の全體を根據づけるために、これまで持續し來つた體系的考察の中心としてこゝに五たび形象作用の考察を進めて、序說に於て設定せる問題の解答を試みるためにこれを「形象」と「理會」との二つに分ちて結語に導きたいと思ふ。

形象

形象作用は多様なる要素の對象的結晶作用の意識現象である。故にその本質を知るために先づこれを基本的要素に分析する方向と、分析されたる基本的要素を統一する方向とに分けて考へなければならぬ。その基本的要素の分析と統一とに關する現象學的方法に就ては既に「序說」(第七頁參照)に於て述べたのであるが、その最後の統一としての止揚作用の立場に於ける原現象の「原集積」に於てもなほ零位(「無」)を境界として、二つの限定されたる世界の極限の對立を見た。形象作用はその對立の融和の作用である。しかも象徵的關聯の深奥に存在する人格的座標又は象徵的定位と象徵的形式との對立を見失ふものではない。われわれは方法體系の中樞として形象作用に到達することはできるが、それを直ちに「象徵的」の名の下に晦ますことは、これまで學者たちに依つて注意深く避けられて來たのであつた。從つて方法論的頂點(methodischen Höhepunkt)としての對象の定め方に於ても、依然として「こころ」

と「ことば」との繫がりを保持するのである。唯それは慣用語的「意味」と「言語」(又は「內容」と「形式」)ではなく、强ひていへば「意義」と「表現」との一元的關係を示すものであるが、幾重かの兩極的關係をふるひ落しふるひ落して單純化した公式である。たとへば山路を登るものが幾曲りかの九折を攀ぢて頂上に立ちて麓の方を見下す時に、脚下にその全景を眺め得るやうな境地に立つものである。

この立場に立ちて慣用語的「文學史」を見る時に、その主潮は、「こころ」と「ことば」の繫がりを結びつける一線の上に展開する不斷の流動であり、慣用語的「文學概論」の對象は、「こころ」と「ことば」の繫がりを連ねる點の方向に沿うて現はれる諸相である。故に樣式史と樣式學との二つの研究法系列を連結してその根柢に共通なるものは形象作用の研究である。玆に極めて簡單にしてこれ以上分割することを得ない公式に於て、文學研究の對象を見出すことができるのである。

理會の對象は簡單なる公式を以て示される形象作用である。然るにこの對象を目標とする理會作用の特性

理會 は、その對象が象徵的內實(Symbolgehalt)であるために、自ら純粹直觀作用として、慣用語的「解釋」とその原據を異にするのである。玆に慣用語的「訓詁」・「註釋」・「鑑賞」・「批評」等と區別して、「解釋」を規定するとともに、その本質としての「理會」は、「理解」・「誤解」・「無理解」等とも區別せられるのである。解釋學の對象としての理會作用の方向は敍述的機構の中に跼蹐するものではなく、表現的機構の契機に立ちて、「時」に沿うて動くのである。故にこの二つの方向はすれちがふもののやうに考へられ(「序說」第八頁參照)素樸的に「印象」

と混同して、不確實なる空虚なる作用のやうに見なされるのであるが、「理會」は空間性と時間性との集積としての「形象」の流動を對象とするのであるから、その巨細に行き渡りて、時空性を貫く推論式的思惟の明澄の中に完うせられるのである。

理會作用は形象作用と同じく、幾多の「知る」といふことの軋轢の中から、彫工がその仕上げの際に滓渣を吹き掃ふやうに、感覺的・知覺的・印象的なる一切の作用を振り切つた作用である。それ等は敍述的・表現的機構の部分に執着するものであるが、眞に理會作用といふごときものは、それ等を包容するものでなければならぬ。理會作用は全集積を把握するが故に克く判斷することができるのであらう。文學作品の樣式學的研究に於ても樣式史的研究に於ても、その對象を全一體として解釋することができるのは、理會作用が單に對象に働きかけるといふごときことではなく、それを包攝するためであらねばならぬ。

この立場に立ちて、「文學史」の研究を見る時に、わが日本文學史の研究に於ては、先づ三千年に亙る日本文學の展開を全一體として展望しなければならぬ。又「文學概論」の各文學群の研究に於ても、恰も精巧なる藝術品を觀る時のやうな心持が副はなければならぬ。さうして樣式史と樣式學との全面に亙りて、理會作用の對象となるものは形象作用である。形象作用は「こころ」と「ことば」とを繫ぐ簡單なる公式を以て現はすことができるのであるが、「こころ」と「ことば」とは繫がれるものであつて、これを「繫ぐもの」は「繫がれるもの」に先行しなければならぬ。理會作用はこの簡單なる公式を把握してその結晶を看得することである。嘗て謂つたやうに、雪片を手にして、その微妙なる結晶を見んとする時、掌上に在るものは一滴の水である。もし雪片の微妙なる結晶を視んとせば、直下に觀取

しなければならないのである。水滴を分析して微妙なる結晶を見んとするごときは、文學研究に於ける「解釋」の作用ではない。

結語

形象と理會との作用を考察して、これを簡單なる公式に綜括した。日本文學の研究に於て、われわれの操持しなければならない原則は、この簡單なる公式の推論式的思惟の能力にあるのではあるまいか。われわれはこれを兒童・生徒の「讀方」の時間に於ても見ることができる。又卓越なる學者の俊敏なる觀照に於てもこれを見ることができる。それ等の叡智的なる理會作用の特性は一に單純に徹するが爲であるまいかと思ふ。われわれが研究に際して左顧右眄する混亂を克服して、一氣に對象に肉薄する威力を自得することなく、又神氣溷濁して明鏡止水の如き明澄の境地を操持することができなかつたら、徒らに周圍から壓倒せられて研究の自由と晴朗とを把持することができないであらう。卽ち學問的性格の內省と自律とは、全ての學問の研究に於て方法を産出する動力であるが、特に精神科學としての文學の研究に於ては、特殊の「注意」の集注を必要とするのであるから、學問的性格の不斷の反省と鍛錬とは、研究の方法を自發自展せしむる原動力であるのではないかと考へる。自覺的體系としての方法論的體系こそ、慣用語的「研究法」に代はりて、日本文學の研究法として構成せらるべきものではあるまいかと考へる。

玆に日本文學研究法の說述を終るに當りて、「序說」に於て謂つたやうに研究法の體系的理念として極めて簡明なる公式を採りあげることができたことを告げる。しかしその運用は各自の操作に依らなければならぬ。「手」を以て研

究すると謂つたのは、それを現はして見たいと考へたのであるが、それはうちあけていへば、自分で自分に謂つて聞かせる語である。それを他に向つて語る形として書きつづけたのは、日本文學の研究の方法に就いて、長い年月の間、心がけて來たさまざまの思ひを想ひ起して、われわれ日本文學の研究に志すものが、各自に常に明るい強い澄みきつた心もちで研究を遂行することを望ましく思つて見たからである。

（完）

昭和七年一月十日印刷
昭和七年一月十五日發行

岩波講座 日本文學 第八回配本

編輯兼發行者 印刷者 東京市神田區一ツ橋通 岩波茂雄

印刷所 東京市神田區錦町 精興社

大森製本

發行所 東京神田一ツ橋通 岩波書店